

翻 訳

アディナ

ヘンリー・ジェイムズ 著

Adina

by *Henry James*

李 春 喜 訳
LEE Haruki

Henry James's "Adina" was written in 1874 at the age of 25. It was published in *Scribner's Monthly* from May to June.

The story is one that deals with the encounter between the old and new world. James's works often take the form of confrontation between American innocence and European evil, which is one of his major themes. In the battle between the old and new world, American innocence usually triumphs. In "Adina" as well, Sam Scrope, after swindling an Italian boy out of an ancient excavated topaz, loses his fiancé, Adina, an American girl. Although the Italian boy is deceived into letting go of his topaz, he succeeds in persuading Adina to marry him, which is his revenge for Scrope's evil deed. At the end of the story, Sam Scrope throws his topaz into the Tiber. Thus, he loses both his fiancé and the ancient jewel.

In this sense, "Adina" is one of the early examples of James's grand theme: the old vs. the new world.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ)、Short Story (短編)、Translation (翻訳)、
アメリカの無垢 (American Innocence)、国際テーマ (International Theme)

I

「死者については美点についてのみ語るべきである」というくらいの礼節は持ち合わせている私たちは、炉を囲みながらサム・スクロープのことを話していた。しかし、その日の集まりの主人が何も言わなかったことに私は驚いた。というのも、彼がサム・スクロープと特に親しかったことを私は知っていたからだ。集まりがお開きになり、私と彼の二人きりになったとき、彼は炉に薪をくべ、私にもう一本葉巻をすすめ、昔を懐かしむ様子でしばらく葉巻をふかし、

次のような話を私に語り始めた。

十八年前スクローブと私はローマにいた。彼のことを初めて知ったのはそのときで、傍若無人で口が悪く活発な若者を、穏やかで思索的な若者が気に入ることがしばしばあるように、私は彼のことを好ましく思い始めていた。当時、彼にはすでに奇行の種——あまり厳しい言い方をするのはやめておこう——ともいうべきものが備わっていた。そしてそのために、その後、完全に縁を切ってしまったわけではない友人の中でも、彼は最も我慢できない人物になってしまった。人がよく言うように、彼はすでに偏屈な人間だった。冷笑家で、へそ曲がり、思い上がっていて、頑固で、恐ろしく抜け目のない人物だった。しかし彼は若かった。そして幸運にも、その若さのおかげで私たちの多くの悪癖は罪のないものになるのである。スクローブにも良いところはあった。そうでなければ私たちの友情も育たなかったであろう。彼は愛想のよい人間ではなかったが、私がこれから語る気まぐれな性格にもかかわらず正直な人間であった。彼に対する私の親切心の半分は、彼の持つ虚栄心にもかかわらず、他人が手を焼いたのと同じように内心では彼自身も自分の短気に手を焼いていたのではないかという感情にもとづくものであった。自分には楽しいと思うことが何もないというふりをしたり、感傷的な旅人が絵のような美しさと呼ぶものは彼の精神にとっては退屈以外の何ものでもないというふりをすることが彼の好みだった。しかし彼にとって世界は新しく、美しいものの魅力はしばしば不意に彼を捉え、彼が気づかない間に、未熟な冷笑主義はその威力を失ってしまうのであった。自分では気づいていなかったのかもしれないが、彼は鋭い洞察力を持ち、気分がいいときには、優れた記憶力と豊富な知識のおかげで、素晴らしい批評家であり極めて有益な友人となり得た。彼は勤勉な古典学者であった。当時私がつけていた少年の頃の日記には教養にあふれた引用がぎっしり詰まっているが、それらはすべてスクローブのものであった。私はローマを経験するにあたって、厳密な科学ではなく、はるかに自由な感情を用いることにした。実際、美しいものであろうと考古学的なものであろうと、私たちの探求における感傷的な部分——たとえば歓喜の表現、思索、ちょっとしたスケッチをすること、バイロンからの引用——は私の仕事だと二人の間で決めていたことは滑稽なことであった。彼は私のことを馬鹿ばかしいほどバイロンのだと考えていた。そして、当時の旅行者がしたように、イタリアが外敵に征服されたことに対して私が詩的なため息をつく、イタリアはそれ相応の扱いを受けているに過ぎず、イタリアにはごろつきと大声で熱弁をふるう者がいるだけで、男だと呼べるようなイタリア人には出会ったことがないと彼は断言した。私がアルフィエリから引用して、「人間という草木」は他のどの土地よりもイタリアで強く育つのだと言って聞かせると、イタリアで強く育つものは、うそとごまかし、怠惰と物乞いと人間のくずだけだと彼は反論した。もちろん、私たちはお互い自分が思っている以上のことを言った。ローマ平原で、もじゃもじゃの髪の下から、杖によりかかって私たちをこっそり見つめている羊飼いに会おうと、私は彼を世界で最も美しい人物だと宣言し、彼をスケッチさせてくれるようスクローブに要求したものだ。スクローブは彼を汚

らしい案山子だと罵り、私のことを低脳なへぼ詩人だと罵るのであった。客間の窓につぎはぎだらけのペチコートが干してある古びた屋敷を見上げようと私が立ち止まり、その幽霊屋敷のような荒廃は、マウント・バーノン通りにある、正面に小ぎれいな鉄格子がはめられたエスタ伯母さんの模範的な邸宅より私の心を打つものがあると彼に言うと、彼は私の腕をつかみ、私が彼の手を振り払うまで、早く立ち去るよう急がせるのだった。そして、その古い屋敷と私の心と私自身に対して馬鹿にした言葉を浴びせ続けるのだった。本当のところは、イタリアの人と自然の両方の美しさが彼を妙にいらいらさせ気分を落ち込ませるのだった。円熟した多くの調和の中で、彼は意識的に辛らつな態度を取っていた。すべてのものが彼に次のように語りかけてくるように思えるのだった——「君も我々のように、ゆったりと愛されるべく無造作に美しくありたいと望まないのかね？」と。心の奥底では彼もそうありたいと願っていた。イタリア的な雰囲気に対するこの無言の嫌悪感を正しく理解するためには、彼がどれほど醜い人物であったかを忘れてはならない。彼は四十歳のときよりも二十歳のときの方が醜かった。というのも、歳をとるにつれて、彼の屈曲した外見を「際立った」と形容することが流行ったからだ。しかし二十年前の近代的美意識の揺籃期においては、それは風変わりな装飾の一形式としてとさえ見なされなかっただろう。一言で言えば、かわいそうなスクロープは下品に見えたのだ。そこが辛いところだった。ご存知だと思うが、外部の者の感覚では、イタリアではほとんどすべてのものに芸術家がスタイルと呼ぶものが備わっているのである。

二人の考えは相入れないものであるにもかかわらず、私たちの友情は成熟し、若さと自由の感覚に深く彩られ、二人は多くの時間を一緒に過ごした。中でも最良の時間は、おそらく、ローマ平原に乘馬に出かけた時だろう。あのような時間を忘れることはない。ニュー・イングランドの六月のように陽の光が強く、紫に彩られたむき出しの斜面やくぼ地がイタリアの黄色い光を浴びているそんな初冬の日々を人々はいつまでも覚えていることだろう。そんなある日、スクロープと私は聖ジョバンニ・ラテラノ大聖堂前の草深い台地を馬に乗り、広い草地を横切っていた。そこでは、何世紀という時の重みであちこち崩れ落ちたり途絶えたりしてしまっているクローディアン水道橋が長い歴史を偲ばせていた。私たちははるかアルバーノにまで遠出をし、低く崩れ落ちた廃墟の残骸の近くでようやく止まった。それはすべて古代の塔の残骸のようだった。古代のものだったのだろうか、それとも草が生い茂ったローマ平原の荒地に数多く点在する中世の要塞の遺物だったのだろうか。これは有能な古典学者としてのスクロープが思索することを好んだ疑問の一つであった。しかし、廃墟を飾る野生の緑の草木の絵のような美しさに彼の注意を向け、深く青い空気の中で透明感のある葉を摘み取っても、彼は肩をすくめて、それはレンガ塀が崩れ落ちるのに一役買ったにすぎないと言うだけだった。私たちは近くの野生のイチジクの木に馬をつないで塔の周辺を探索した。陽の光が照っている側に回ると、草の上で居眠りをしている人物に突然出会った。若い男性が、雑草で覆われた石を積み上げその上に頭を乗せて、正体なく眠りこけていた。彼のそばには錆びた銃があり、近くの空の獲物

袋がその日の彼の運の悪さを示していた。長時間にわたった長い朝の狩りが不毛に終わったことを彼の深い眠りは物語っているようであった。狩猟の技術が未熟であるのか、もしくは、ほとんど本気で取り組んでいなかったに違いない。なぜなら、ローマ平原は年間を通じて小さな獲物が数多く生息しているからだ——少なくとも二十年前はそうであった。その若者の態度に無邪気で若々しい品の良さを見たのは、私のバイロン風のロマン主義のせいにはすぎなかった。片方の足をもう片方の足の上に放り出し、片方の腕は頭の下にあった。もう一方の腕は草むらの上に所在なく投げ出されていた。頭がぐったり後方にそっていたので、若くて力強い喉がむき出しになっていた。帽子が目を覆っており、私たちには彼の口とあごしか見えなかった。「アメリカ人の田舎者が居眠りをしていると見苦しいが、ローマ人の若い農夫が藪をかいて横になっても絵のように美しい」と私は言った。この「農夫」という言い方には問題があったかもしれない。というのも、彼が身につけているものから判断すると、この田舎のエンディミオンは単なる農夫以上の人物だったからだ。私たちが彼を見下ろすように立ったとき、彼は落ち着かなさそうに寝返りをうって何かつぶやいた。「起こすのは気の毒だ」と私は言い、腕をスクロープの腕に通して彼をその場から連れ去ろうとした。しかし彼は抵抗した。私は彼の頭に何かをよぎったことが分かった。

姿勢を変えた美しい若者の、草の上に放り出してあった手が開いた。小ぶりの嗅ぎ煙草入れほどの大きさで、さえない色をした楕円形の物体が上向きの手のひらの上にあった。「彼が手に持っているのは何かな？」と私はスクロープに聞いてみたが、彼は何も言わずただ腰をかがめてそれを眺めていた。「ちょっと僕たちは彼に無遠慮すぎないかい。おとなしく寝かせておいてやろう」と私は言って、その場を立ち去ろうとした。しかし、私の声が彼を起こしてしまった。青年が手のひらを持ち上げたとき、その動作とともに、嗅ぎ煙草入れにたまたまた物体が光にあたって鈍く輝いた。

「あれは宝石だ。たった今掘り出されたばかりで土にまみれているんだ」とスクロープは言った。

その青年は完全に目を覚ました。帽子をもとに戻すと私たちを見つめて、ゆっくりと上半身を持ち上げた。まだ夢を見ているのではないかと確認するかのように目をこすった。それから、宝石に目をやり（もしそれが宝石であるならば）、それを機械的な動作でポケットに押し込み、私たちの方を見て大きく微笑んだ。「イタリア人ではやさしくて穏やかだね！ ニューイングランドの若い農夫をこんなふうを起こしたら、文句を言われて蹴飛ばされるところだよ」と私は大声で言った。

「彼のやさしさを試してみよう。彼が何を持っているのか調べてみるんだ」とスクロープは言った。スクロープはちょっとした骨董品が大好きで、ローマ中の骨董品店を調べ回っていた。それは彼の多くの風変わりな性質の一つだったが、他の風変わりな性質と上手くマッチしていた。彼が古い版画や陶器の中に探し求め楽しんでいたものは、大抵の場合、形の美しさやロマ

ンティックな連想ではなかった。それは精巧で忍耐強い職人技であり、細かい彫琢技術であり、巧みな手法だったのである。

「やあ」と私はその青年に声をかけた。「邪魔をするつもりはなかったんだ。」

彼は体を揺すって起き上がり、濃い巻き毛の下から今だ無邪気に微笑みながら私たちの前に立った。彼の笑みにはとても単純なところがあった——少しおかしなところがあって——彼には少し知的な障がいがあるのではないかと思った。若かったが、単なる若者ではなかった。目は暗く沈んでいたが、親しげな光で輝いていた。開いた唇からは力強く白い歯が光っていた。顔色は、イタリア人に共通のあの漠然としたみなぎるような青白さのために、きめの粗さが取り除かれたような美しい濃い褐色だった。彼は若いヘラクレスのような体格をしていた。牧歌的な景色の前景にこれ以上相応しい人物は望み得ないほど美しい顔立ちをした放浪者だった。

「休息をとるほどのことはまだ何もしていないようだが」と、空の獲物袋を指しながらスクロープは言った。「鳥はまだ一羽も捕まえていないようだね。」

その青年は袋とスクロープを見て、頭をかいて笑った。「僕は生き物を殺したくないんです。銃を持ってきたのはわらを引っ張りながら歩き回るのは馬鹿げているからです！叔父は僕が何もしていないと言っていつもぶつぶつ言うんです。銃を持って出て行くのを見たら、少なくとも僕が自分の夕食の獲物は捕ってくると思うでしょう。でも叔父は銃の発射装置が壊れていることを知らないんですよ。たとえ火薬と弾があったって、この古いラッパ銃では撃てないんです。だから僕はお腹が空くと寝ることにしてるんです」と彼は言って、魅力的な笑みを浮かべ、新しい寝床にちらっと目をやった。「鳥はやって来て鼻の上にとまって僕を起こしたりはしません。叔父は夕食に僕が何を持って帰ってきたか聞こうなんて考えたこともないんです。彼は聖職者で黒パンと豆を食べて生きているんです。」

「君の叔父さんて誰なんだい？」と私は尋ねた。

「ラリチアのジローラモ神父です。」

彼は私たちの帽子や鞭を見て、私たちの行程や、馬のこと、料金はいくらだったのかとか、私たちの国籍のことやローマでの生活ぶりなどいろいろ質問をしたあと、草を食んでいる私たちの馬の方に行って鼻を撫でていた。「彼はそこに何か貴重なものを持っているのだ」と、彼の後を追って歩いているときにスクロープは言った。「彼は明らかにそれを地面の中に見つけたんだ。ローマ平原にはまだ財宝が一杯埋まっているに違いない。」私たちが追いついたとき、彼はその何かはっきりしない貴重品を体の背後に押しやり馬鹿みたいに笑った。それがスクロープの癪に障った。「あいつは馬鹿だ！」とスクロープは叫んだ。「僕がそれをひったくるとでも思っているのか？」

「君がそこに持っているのは何だい？」と私はやさしく聞いてみた。

「どっちの手に持っているでしょうか？」彼はまだ笑いながら言った。

「右だ。」

「左だ」と、スクローブはためらって言った。

青年は背中の後でもうしばらくごそごそしていた。それから仰々しく宝物を取り出した。スクローブはそれを手に取って注意深くハンカチで拭いたあと、近眼の目をそれに近づけた。私は彼がそれを調べるがままにしておいた。ジロラーモ神父の甥の方により関心があったのだ。その青年はスクローブのことを心配そうに見ていた。その間、スクローブはその小さな黒い石をこすったり汚れをはがしたり、息を吹きかけて光にかざしたりしていた。青年は顔をしかめて頭を掻いていた。明らかに、それについてスクローブが下してくれる素晴らしい評価について自分の思考を集中しようとしていたのだ。私がスクローブの方に目をやったとき、彼が興奮して顔を赤らめるのを見た。そして私もすぐにそれを注意深く調べてみた。それは大体めんどりの小さな卵くらいの大きさだった。色は鈍い茶色で、長いあいだ土に埋まっていたためにしみがついて、いたるところが土に覆われていた。表面のある一面には深く波の形がついていた。スクローブは私の質問には関心を払わず、その石の汚れを落とし磨き続けていた。そしてついにそっけなく次のような質問をした。「これをどうやって手に入れたんだい？」

「今朝、ここから二マイルほど離れたところの土の中で見つけたんです。」青年はそれを返してもらおうと心配そうに手を差し出した。スクローブは一瞬抵抗したが、思い直してそれを返した。ネズミを捕える熟練した猫のように、彼は本能的に無関心を装い始めた。青年はその小さな石をじっと見つめ、何度もひっくり返したあと、素朴な調子の笑い声とともにそれを自分の背後に再びしまった。

「これはまともなチャンスだ」とスクローブはつぶやいた。

「一体、何のことなんだ」と私はいらいらして尋ねた。

「僕に聞くのはよしてくれ。それを音に出して言葉にしたくないんだ——これはすごいチャンスだ——もしそれが僕が考えているようなものなら。でもここに優先権を主張する奴がにたにた笑って立っているだろ。彼をどうすればいいかな？ 奴の頭をラッパ銃の端で殴ってやりたいよ。」

「君がそれなりのものを払ってやったら売ってくれるんじゃないか。」

「それなりだって？ それなりがどれくらいか奴に分かりっこないさ。奴には燕とトパーズの違いだって分からないだろ。」

「じゃあ、あれはトパーズなのか？」

「黙っていろって。それが何だか口にしちゃだめだ。奴はそれを燕だと思って売らなきゃいけないんだ。どこでそれを見つけたのか君に言わせよう。」

その青年は満面の笑みを浮かべて素直に話してくれた。彼はぼつんと立った古いセイヨウヒイラギに残された落雷の跡を調べていたそうだ。(事実、一週間続いた季節はずれの蒸し暑い日が、数日前、もの凄い雷雨とともに終わりを迎えていた。) その木は粉々に砕け、枯れてしまって、根元では土が盛り返されていた。落雷が地中深くめり込み、真っ直ぐ穴が開いて杭が打ち

込めるほどだった。「なぜだか分からないのですが、その穴を見て立っていたとき、その裂け目に銃の先を突っ込んでみたんです。銃の先が幾分入っていったところで、何か金属の表面に当たったような妙な音がしました。僕は銃先で何度か突つてみましたが、同じ音が聞こえただけです。そこで僕は——『何か隠してあるに違いない—— お金だ、多分。調べてみよう』と独り言を言って、セイヨウヒイラギの一本の枝から鋤を作って穴を掘り、土を掻き出してあちこちかき回したんです。二十分ほどして腐食した小さな鉄の箱を拾い上げました。箱はひどく腐食していたので蓋と側面が便箋のように薄くなっていました。こつんと叩いてみると、ぼろぼろと壊れてしまいました。箱の中には同じような種類の鉄の破片が詰まっていて、それは箱の中の仕切りだったようです。湿った土も詰まっていて、それが穴や隙間から滲み出ていました。その真ん中に土とかびにまみれてこの石が埋め込まれていたんです。他には何もありませんでした。僕は箱を粉々に潰して石をとっておいたのです。見て下さい！」

スクロープは肩をすくめてそのかびだらけの宝物を取り戻した。青年は、それを手から離すと、その石は千年前のものだと言いつつ放った。ジュリアス・シーザーの王冠に飾られていたんです！

「ジュリアス・シーザーは王冠なんかぶっ壊れていなかったんだよ」とスクロープは礼儀正しく言った。「千年前のものかもしれないし十年前のものかもしれない。瑪瑙かもしれないし火打石かもしれない！私には分からない。でも、一か八かこれを僕に売る気はないかい？——」そして彼はそれを三回上に放り投げ、落ちてくるところを受け取った。

「それは貴重なものだと思います」と若者は言った。「この辺では価値のあるものが毎日見つかります——他の人が何か見つけるのなら、私が何か見つけても不思議ではないでしょう？雷はなぜ別の場所ではなくてちょうどあの場所に落ちたのでしょうか？それは慈悲深い私の守護聖人聖アンジェロ様によってそこにもたらされたのです！」

この青年は結局のところそんなにまぬけな人物ではなかった。むしろ、無邪気さと分別を不可解な形で兼ね備えていた。「もし本当にそれが欲しいなら、君がそれに値をつけてけりをつけてしまえよ」と私はスクロープに言った。

「『けりをつけてしまえよ』と言うのは簡単だが、彼が納得する最低額はどれくらいだと思います？」

「私にはその価値なんてさっぱり分からないよ。」

「この価値なんてどうでもいいんだ。価値を見積もって、これをもとの穴に戻したっていいんだ——この価値については、彼にも何も分からないだろう。知る必要もまったくないんだ。」スクロープは、一瞬もの思いにふけり、銀貨を数えてドルと同額の十スクードを草の上に放り投げた。アンジェロは——彼は事実上私たちに名前を言ったのも同然だった——銀貨が落ちるのの一つ一つ見ていたが、それを拾おうとはしなかった。しかし、彼の目は輝いた。彼の純真さと抜け目なさがこの事態について議論をしていた。積み重ねられたちょっとした銀の山は大

変好ましいものだった。しかし一方で、割に合わない取引をすることは望むところではない。公平性への無言の訴えでもって彼はスクロープを見つめたが、それが私の心を強く打った。そしてそれはわずかながらスクロープの心にも影響を与えた。というのも、一瞬ためらったあと、スクロープはスクード銀貨をもう一枚放り投げたからだ。アンジェロは困ったようなため息をついた。スクロープはふいに振り向いて馬に乗り始めた。次の瞬間私たちは馬に乗っていた。アンジェロは金を見つめて立っていた。「それで満足かね？」とスクロープはそっけなく言った。

その青年は妙な笑みを浮かべた。「あなたには良心があるのですか？」と彼は尋ねた。

「ずうずうしいのもいい加減にしろ！」とスクロープは顔を真っ赤にして叫んだ。「俺の良心がおまえに何の関係があるんだ？」そして彼は馬に拍車をかけて駆け出した。私はその青年に手を振り少しゆっくりとした速さで彼のあとを追いかけた。しばらくして私は馬に乗ったまま振り返った。アンジェロは私たちが出発したときのまま突っ立って、私たちの方を見つめていた。明らかに金にはまだ手をつけていなかった。しかしもちろん、その金は持って帰るに違いない！

私はスクロープと並んで黙って馬に乗りながら、彼の場当たりの公平さについて考えていた。清教徒や詭弁家と見なされることからしり込みするほどには私は若かったが、アンジェロの宝物に対するスクロープの二重の評価に詭弁を感じ取っていた。もしそれが彼にとって貴重なものであるなら、それはアンジェロにとっても貴重なものであるだろう。それに対してスクード銀貨十枚は——一枚加えたところで——十分な支払いではなかった。よりもよって、不器用なスクロープにも巧みな説明が必要になる駆け引きができるのだと知ることは、ある種の犠牲を私にともなった。そういう状況だったので、彼は、自分の理屈がかなり強引だということが分かっているかのように半分怒って自己弁護を始めた。「言えよ！言えよ、かまわないから！」と彼は叫んだ。「君が考えていることは分かてるんだ——僕があのかわいい顔をしたまぬけを騙したというんだろ？——そうさ、明らかに僕は詐欺師同然さ！でも、きっぱり言っておくけど、僕はあれを安く手に入れたことを恥じてはいないからね。あれは十スクードか、そうじゃなければがらくたさ！もう一ファージングでも積んでいたら、奴の眠たそうな目を開けてやる場所だったかね。あれは自分の良心を守り行動すべき場面だったんだ。あのまぬけな少年にはもう三十分もあの貴重なものを預けるわけにはいかなかったのさ。あの宝石が奴の手にわたっていたらどうなったか分からない。僕は芸術や科学や教養のためにそれを救ったんだ。あれの適切な価格など言えるはずがない。がらくたを買うのにどこで一万ドルを調達しなきゃいけないんだい？もし僕が百ドル出すと言っていたら——頭は悪いが、あの男前の彼は素早く聞き耳を立ててそれにこだわっただろう！彼は考える時間と助言をもらう時間をくれと言って、村の叔父さん、つまり、あの抜け目のないジロラーモ神父のところに急いで帰って行ったにちがいない。そこで村の長老たちが秘密会議を開き、そして——何か分からないが、ローマに行

ってカステイラーニ氏に会うべきだとか、ローマ法王の発掘責任者に会うべきだとかといったことを決めるんだ。そこへ分け知り顔の誰かがうわさを聞きつけ、神父の立派な甥は奇跡によって幸運に導かれ、伯爵の娘と結婚するのですとか何とかジロラーモ神父に耳打ちするんだ。そしてすべて事が済んだとき、僕が骨を折ったのに僕はどこに行けばいいんだ？実際は、僕がしっかりと事を見極め、あらゆる角度からこの問題を考え、決断を下すんだ。僕がああ価値のあるものを手に入れ、利口なアンジェロ君は一ヶ月大騒ぎして暮らせるだけのものを手にし——彼はそれを楽しむことだろうよ——そして、また寝てりゃいいのさ。彼にはいい夢を見てもらおう！奴はどれくらい金が欲しいのだ？金は彼を墮落させてしまっていただろう！僕は伯爵の娘も救ったんだよ。奴は妻を殴ったに違いない。それでみんなが満足しているのに、それが君には気に入らないのかい？僕の気持ちは落ち着いているよ。僕は金持ちになったわけでも貧乏になったわけでもないんだ。あの十一スクードに対しては、害のないもてなしを無邪気な青年にしたという感覚があるから、僕は損をしたわけではないんだ。それから——分かって欲しいんだけど——あの石を金に換えるつもりはないんだから、僕は金持ちになったというわけでもないんだ。そこがデリカシーの問題さ。あれは単なる石でそれ以上のものじゃないんだ。僕がその石から得られるものは、それをランプの下にかざして、それが何の石か話したときに人が目を見張り息をのむのを楽しむことぐらいだよ。」

「それで、一体それは何の石なんだい？」と私は真剣に尋ねた。

スクロープは突然上機嫌でくすくす笑い、私の腕を軽くたたいた。「もうちょっとの辛抱だよ！夕方、ランプの下で光らせてみてから教えてやるよ。まず確認したいんだ」と彼は突然深刻な顔をして答えた。

しかし、私が気になったのはその深刻さではなくて、浮かれたように高揚した彼の声の調子だった。私はその石を憎み始めていた。その石が彼を墮落させてしまったように思えたのだ。彼の動機についての巧みな説明は何かを漠然と説明しないまま——ほとんど理解不可能な状態——にしていた。最も単純な性質の中にも怪しげな一面があるものだし、最も健康な人の中にも込み入った道徳的な問題があるものだ。スクロープは単純な人間ではなかった。彼の挑戦的な自意識は病的だと思われていたかもしれない。そこで私は、この件に関する彼の不当な行為を何と名づけていいのかわからない悪意の種の果実だと考えるようになった。彼には人を楽しませる能力が乏しいことを、イタリアにあるすべてのものが無言でとがめているように思われた。人間と自然のもつ言葉にできない奥ゆかしさが、彼は辛辣な冷笑家だと彼の耳にささやいていた。これこそが、熱のこもった同情的な私の語りかけに対する彼の不寛容さの真の動機であり、いらいらするようなイタリア的至福のある形態（それは感覚を備えたものであるが）から、正当な手段ではなく不当な手段で奪い取った優越的な感覚を今回限り彼に味わわせようと駆り立てたものだった。これはどちらかといふとこの問題に対する形而上学的な記述であるが、当時私は言葉にせずにその秘密を解き当てたのだった。

スクロープは手に入れた石を鑑定家のところには持って行かず、考古学的な意見も求めなかった。単なる好奇心を装って、古い宝石を洗浄し研磨して修復する最善の方法を密かに調べた。そして精密な道具や酸性の液体を買い込み、部屋のドアの鍵を閉め、宝石のサイズを測った。私は何も聞かなかったが、彼の頭はそのことで一杯であることは分かった。そしてその宝石がかなり珍しいものであることを日に日に確信していった。彼は新しく恋をしているかのように妙な歌の断片を鼻歌で歌ったり口笛で吹いたりしていた。浮かれているスクロープの歌声を耳にする度に、ドイツ民謡に登場する一組の強奪者のように立ち去った私たちをぼんやりと見つめているアンジェロの姿を私は突然思い出すのだった。スクロープと私は同じ家に滞在していた。週末のある夜、私が寢床に入ったあと、彼は私の部屋に入ってきて、まるで家に火がついたかのように私を揺さぶり起こした。彼が口にする前に彼の意図が分かったので、部屋着を引っかけて彼の部屋へ急いだ。「朝まで待てなかったんだ」と彼は言った。「たった今最後の仕上げをしたところだ。最高に美しいだろ！」

白いベルベット地のクッションの上に置かれたまばゆい光を放つ黄金のトパーズが、ランプの明かりのもときらきらと輝く中心から光を反射していた。彼は拡大鏡を私の手に押しつけ、テーブルのそばの椅子に私を座らせた。精巧な沈み彫りが宝石の表面に施されているのが分かった。しかし、そこに彫られている像や文の驚くべき性質を理解する準備ができていなかった。中心には裸の全身像が彫られていて、私は最初それを異教の神だと思った。その次に、真っ直ぐ伸びた片方の手に王権を象徴する宝珠がのっているのが見えた。もう片方の手には皇帝の笏が彫られており、狭い額をした頭には月桂冠が飾られていた。宝石の表面のふちには、精巧な混乱状態の中で絡み合った兵士や馬、古代の戦車や若い男女が一続きの像として彫られていた。そして、帯状に彫られた裝飾模様の内側の人物の頭上には次のような文字が刻まれていた。

全神聖ローマ帝国皇帝ティベリウス

その作品の出来映えは驚くほどの精緻を極めていた。私が手に持っている大きな拡大鏡の下で、その彫像は古代大理石の中でも最も名高い作品の完璧さと仕上がりを示していた。その宝石の色は素晴らしかった。その純粋性が回復された今、それはとてつもなく大きく見えた。それはどこから見ても宝石の中の宝石であり、値をつけられるようなものではなかった。

「ティベリウス皇帝と握手をするためなら起きてくる価値があると思わないか？」と、私が驚いているのを見てスクロープは大声で言った。「我々は十九世紀のみすぼらしいアメリカ人にすぎないが、拝謁の栄誉を賜っているのだ。ひざまづけ、野蛮人め、我々は偉大なるものの御前にいるのだ！ぼろ布とやすりを持って昼夜を分かたずに精魂を尽くしたことに意味がなかったと言えるだろうか？僕は世紀を飛び越えたのだ——全ローマ帝国皇帝を復活させたのだ。想像できるか、理解できるか、君の心臓はろっ骨を激しく打ちつけているか？どうやら、そうではなさそうだ。皇帝がそれを身につけたのはここだ、退屈な現代人よ——ここだ、肩に近い胸のところに、彫刻を施した金の枠にはめて、すももほどの大きさの真珠でふちを飾り、金ボタン

のついたマントの両側を留めていたのだ。これは皇帝の紫衣の留め金だったのだ。恐れよ！」彼はその見事な宝石をつかみ、私の胸に押しつけた。「疑いなし——異論なし——批判もなし——でなければ我々は不倶戴天の敵同士だ。どうして分かるのかだって？——根拠は何だって？単にそれがそうだからだ！それ以外のものにしてはあまりにも高価なんだよ。こんなにも見事な沈み彫りは世界に二つとないのだ。これは僕にその秘密を語ってくれたのだ。この一週間この宝石は古いラテン語を何時間も私にささやき続けたのだ。」

「どうして鉄の箱に埋められたのか語ってくれたかい？」

「すべてを語ってくれたよ——今君に言える以上のことをね。今はこれを讀めることで納得してくれ。」

私は何時間もそれを眺めていた。仮にスクロープの説が間違っていたとしても、彼の言うとおりだったとしてもおかしくなかった。そして、もしティベリウス皇帝がそのマントにこのトパーズをつけていなければ、皇帝の威厳はそれだけ色あせていただろう。しかしデザイン、刻まれた文字、形状、すべてがそれが大きな役割を担っていたことを物語っていた。「まったくだ」と私は言った。「知られている限りでは最も素晴らしい沈み彫りだ。」

スクロープはしばらく黙っていた。「知られていないものについては」と彼はついに答えた。「誰にもそのことについて知らせるわけにはいかない。秘密を固く守ることを君にもここで誓ってもらう。僕はこれを他の誰にも見せない——僕に女がいれば、その女は別だが。僕はそれが何か素晴らしいものかもしれないと思いか八か金を払ったんだ。それを所有しているという名声に対して金を払うことなどできない相談だ。かなりの富がなければそんなものを買うことは不可能だ。世界で最も素晴らしい沈み彫りを所有しているとなると僕もそれなりの人物だ。そうなればあのアンジェロ君にも申し訳ない。僕はその名声を隠しておいて、単純にその芸術的価値のためだけにその宝石を大切にしたいんだ。」

「それで、その単純な芸術的価値っていうのはローマのスクードでいくらなんだい？」

「分からないよ。好きな額を言ってくれ。」

ベルベット地の上で輝いている金色のトパーズを私はもう一度見た。自分の女にもそれを見せないという魅力的な誘惑に彼が打ち勝てるとは思えなかった。そこで私はついに言った。「それを女に見せるのは考え直した方がいいと思うが。」

それを言ったとき、その言葉が時宜にかなったものだとは私はまったく考えていなかった。というのも、あの物語の中でピーター・シュレミールが影を持つことを否定されているように、スクロープにそのような美しい女性とお付き合いができる機会などあるはずがないと漠然と思いついていたからだ。しかし一ヶ月も経たないうちに、スクロープは魅力的な女性と婚約することになった。「近くにいるということは大切なことだ」とクラブは言っている。クラブはほめかしているが、外国にいるときは特にそうだ。スクロープの場合、二人の間の距離は特に近かった。彼の従姉妹であるワディントン夫人がローマに到着した。彼女は若い女性と一緒にだっ

た。その女性は実際には親戚ではなかったのだが、従姉妹関係というありとあらゆる機会をスクロープに提供し、手の届かない美しい女性としての魅力を増すのだった。スクロープはその女性に紹介された。アディナ・ワディントンはワディントン夫人の継娘だった。夫人は八年ほど前に幼い娘のいる男性と結婚した。ワディントン氏は最近亡くなったばかりで、二人の女性は深い服喪期を終えつつあった。共通の悲しみを示す黒っぽい喪章が二人の絆が強いことを表していた。事実、ワディントン夫人は継娘より十歳ほど年上にすぎなかったのだが、二人の絆は固かった。夫人は私が知る限り欠点らしいものを持たない素晴らしい女性だったが、彼女は世の中全体も自分と同じように善良なものだと考えていて、彼女が夕日をスケッチしている間、夕食を待たせたりすることが時々あった。彼女は丈夫で顔色が良く、どちらかというとき大きな声で笑ったり話したりするので、画廊や教会では多くのお堅いイギリス人たちをよく振り向かせていた。

彼女はちょっとした小旅行に熱中していて、フラスカティやチボリでは、悪気はないのだが、彼女の重みが小柄なロバを困らせていた。それを楽しんでいる様子が示しているのは、私たちが持つすべての情熱と同じように、風景美への情熱も、私たちの中の最も善良な者でさえ残酷な人物にすることができるということだった。騒々しい女性は嫌いだとスクロープが言うのを私はよく聞いていた。しかし、自分の従姉妹の高揚した感情については大目に見ていて、彼女をエスコートし、彼女に助言を与えることは当然自分の役目だと考えていた。俗っぽく言ってしまうと、彼は利己的ではなかったということである。形式的な作法に対して紳士たるものが払わなければならない犠牲についてとても明確な考えを彼は持っていた。二人の女性がスクロープの善意を当てにするその気楽さに私は驚いたが、その謎を解明する鍵はその他の多くの錠を開ける鍵でもあった。スクロープはワディントン嬢に恋をしていたのだ。ワディントン嬢の甘美な落ち着きは夫人の過剰なエネルギーとよくバランスがとれていた。アディナという可愛らしい名前が彼女の性格に妙にぴったりと当てはまっているように思えた。小柄でほっそりとしていてブロンドの髪をしていた。彼女の肌の色は、黒いドレスのせいで、ある種花が咲くような子どもらしさを帯びていた。彼女のとび色の髪は、ルネサンスの絵画に描かれている髪型のように、いくつもの見事な三つ編みに編みあげられていた。彼女は深い青色の目で相手を見つめ、相手のことをよく知れば私はもっと率直になりますという臆病な約束が内気な冷たさの裏にひそんでいるように思われた。彼女は率直に話せるほど私のことを知ろうとは決してしなかった。彼女はほとんど話をせず、私たちは一日に十語も言葉を交わさなかった。しかし白状するが、彼女の目の中に不安になるような魅力を私は感じていた。しかしながら、それが語られることはなかったのだ、禍をもたらしようなことはなかった。

しかし、スクロープはあえて自分の気持ちを口にした——あるいは少なくとも、十分雄弁にそれをほのめかした。私は嫉妬するほど深く気持ちを揺さぶられたわけではなかった。そして、彼の秘密を知ったとき、私はほっと安堵のため息をついた。そしてそのことで再び彼を見直す

ことになった。冷静にそれを判断しようとする私の努力にもかかわらず、気の毒なアンジェロの宝石に対して彼がとった態度は、私たちの友情に不愉快な変化をもたらした。私は彼には本当に心というものが無いのではないかと自問した。彼の知性はどこかネジが一本ゆるんでしまっているのではないかとさえ思った。しかし、ここには素直な者だけが感じることのできる健康で自然な心のもった情熱——つまり、そのためにより良い人物にならなければ誰にも感じることのできない情熱があった。そして、洗練された彼の感情の輝きはアンジェロに対するそれなりの評価を避けようとする気持ちを消し去るであろうと私は期待し始めていた。彼は身も心も魅了されていた。そして二ヶ月の間、彼は本当に心を奪われて、醜い顔のための戦いに辛辣な機知を放つことを止めてしまった。人が言うように、幸福感が彼を「冗長」にすることはめったになかった。しかし、彼が将来の見通しに大いに満足していることは見て取れた。私と彼が一緒にいるとき、自分の考えていることについて風変わりで神経質な調子で突然笑い出すことが一度ならずあった。そのような状況のとき、何を考えているのか教えてくれと彼に頼んでもどうしても言ってくれないので、これは彼の幸運に対する滑稽な驚きだと私は独り言を言った。どのようにして彼にあのような美しい女性の心を射止めることができたのだろうか？もちろん、このことについて彼女から聞くことができたことはもっと少なかった。しかし、ワディントン夫人と私は恋に落ちているわけではなかったので、スクロープとワディントン嬢が二人きりでいるとき（結構ひんぱんにあった）は、二人のことについておしゃべりする他なかった。

「あの娘は何も言わないんですよ」とその善良な未亡人は言うのだった。「なぜなぞについての答えを知るなら、白黒はっきりした答えじゃないと困るわ。私の従兄弟はいわゆる『男前』ではではないわね。しかし、アディナは彼に興味を持っていると思いますよ。情熱がどのようにスクロープの外見を変え内面を高揚させるのか私たちには分かったもんじゃないわ。それに、きまぐれな若い娘が心なんて呼ぶあのちょっとした小道具で何をするかなんて初めから分かっている人なんていないわよ。あの娘は変わった子よ。きまぐれ屋じゃないんだけど夢想家なのよ。私が見るところでは、あの娘は私の従兄弟が醜くて風変わりだからこそ気に入っているのよ。ありそうなことだけど、あの娘は『知的な』夫を手に入れると決めたんだけ。もしスクロープが男前でなくて、軽率でもなくて、過度に礼儀正しいということもないんなら、彼は頭がいいという可能性がとてもし高いわけよ。」しかしながら、なぜアディナがスクロープの言うことを聞かなければならなかったのかというのは彼女自身の問題だ。いずれにせよ、彼女は彼の言うことを聞いたのだ。そしてそのとき彼女が向けた可愛い関心に多分彼はおだてられ魅了されたのだろう。

私たちはあの皇帝のトパーズのことはめったに話さなかった。それは軽く触れるような話題ではないように思われた。当然のことながら、それを所有することは所有する者を厳粛な気持ちにさせるのかもしれない。あの宝石の輝きの単なる記憶にすぎなくても、それは私の良心に

重くのしかかってくるようだった。私たちはあれ以来アンジェロの姿を見ていなかったの、私はどんな形でもいいから彼のことを知りたと思っていた。しかし、彼の姿を見ることなく数週間が過ぎ、あの異例の取り引きのあと彼の側に何が起こったのか分からないままだった。クリスマスがやって来て、それとともにいつもの儀式的季節の到来だった。スクロープと私は精力的に必要な方策を講じた——つまり、それは拳や肘や膝の問題で——システィーナ礼拝堂で行われる真夜中のミサに出席する二人の女性のための場所を確保することだった。ワディントン夫人が私の特別任務だったが、外出するやいなや私たちは人ごみの中であとの二人の姿を見失ってしまった。私たちはしばらく柱廊で待っていたが、通り過ぎる人たちの中に二人の姿を見かけなかったの、彼らは勝手に帰宅すると決めて、相手も私たちに同じことをするよう期待しているに違いないと考えた。しかし、ワディントン夫人の宿にたどり着いても二人の姿はなかった。こんなにも長い間二人の姿が見えないということは、彼らは聖ペテロ教会に行つてあの広大な暗い空間の中で細いろうそくの輝きを眺めているのではないかと思った。若い女性があれば「魅力に欠ける」若い男性と午前三時に歩き回るといのは通常あまり見かけることではない。しかし、「まあ、あの娘は彼の従姉妹みたいなものだから」とワディントン夫人は言った。二人が戻つて来たとき、彼女はそれ以上のものだった。私は家に帰り、ベッドにもぐり込んで、クリスマスの朝の鐘で目が覚めるまで寝ていた。私は起き上がって、クリスマスの挨拶をするためにスクロープの部屋の戸をノックしたが、戸を開けに出て来た彼は、それがいかにもその場に相応しくないことに気づいた。彼は身支度を半分整えただけで、部屋に戻るとベッドの外側に身を投げ出した。私が思ったとおり、彼はアディナとサンピエトロ寺院へ行き、きらきら輝く美しいろうそくの光を見つめていたのだった。彼は落ち着かない様子で部屋の中を歩き回っていた。何か言いたいことがあるのだということが分かった。そしてとうとう彼はそのことに触れた。「実は、受け入れられたんだ。婚約したんだよ。いわゆる果報者というやつかな。」

もちろん、私は彼を祝福し、彼の選択が素晴らしいものであることを熱をこめて請け合つた。ワディントン嬢ほど愛らしくて純粋で興味深い女性はいなかった。私の祝福の言葉に彼が感謝していることは見てとれたが、彼は自分の気持ちを「披露」することを嫌がり、私と握手をし、次のように言うことで満足した。「もちろん、彼女こそ相応しい女性さ。」彼は部屋の中で二、三度向きを変え、鏡台の前で突然立ち止まり、化粧箱の引き出しを取り出した。そこにはあの素晴らしい宝石があった。私が記憶していたよりもそれは大きかった。「婚約者に贈るにはちょっとしたものだろ」と、しばらくそれを眺めたあと彼は言った。「どのように身につけたらいいと思う？——どういう風に加工したらいいかな？」

「考えられるのは一つしかないよ」と私は言った。「大きなメダルのようにネックレスにぶらさげるのさ。それが美しい女性の胸に飾られれば、こんなところで君のブラシや髭剃りと一緒にしまわれているより、世界をさらに明るくしてくれることは間違いないからね。でも、僕の

感じでは、ある種の美しさを備えた女性にしかそれを相応しく身につけることができないような気がするね——たとえば、ローマ皇后のような額と古代彫刻のような肩を持った華麗で影のある美しさとかね。青い目と愛らしい笑みのほっそりとした美しい女性では、ちょっとばかり荷が重いんじゃないかな。たとえばもしそれがワディントン嬢の白い首に飾られるとしたら、何かそれが彼女を地面の方に引きずり彼女に謎の痛みをもたらすような気がするよ。」

少し度が過ぎた私の発言に彼は少しばかり気を悪くしたようだった。しかし、引き出しをしまいながら彼は微笑んだ。「アディナはミロのヴィーナスのような肩をしていないかもしれないが、彼女をうつむかせるにはこんながらくたではだめだと思うよ」と彼は言った。

私は毎年クリスマスに教会へ行くわけではない。しかし、天候にかかわらず一人で散歩をし、何か立派な考えが浮かんだら、それを心中に抱いておくことを長年の習慣としていた。今年は南の地でのクリスマスで、地面に雪はなく、そののベルが響きわたるわけでもなく、人に囲まれた暖炉から出る煙が冷たい青い空にのぼっていくわけでもなかった。その日は穏やかで暖かいと言ってもいいくらいだった。空は灰色で陽は射していなかった。もし私が敬虔な気持ちになったとしても、正直に言うが、私はそれを非キリスト教的な記憶の中に求めた。古代の公共広場の周りをぶらぶらし、それからコロシウムの方に歩いて行った。誰もいなかったが、中央の十字架の下のステップに腰かけている人影が見えた——見たところ若い男性で、肘を膝の上に置き、前かがみになってじっと両手で頭を抱えていた。彼のそばを通りかかっても、身動きしたり私に気づいたりした様子がないので、償いの象徴のもとで熱心に黙考している彼を見て、後悔に苛まれている若者の像と見間違えてもおかしくないと言った。あまり彼がまったく動かないので、彼が抱えているのは後悔以上の深い情熱ではないかと私は思った。突然彼が顔を上げ、そこに私はアンジェロの姿を発見した——それは直ちにというわけではなく、彼自身の表情にゆっくりと表れた認識に応えるような形だった。私たちが出会ってから七週間しか経っていないのに、彼は三歳も年を取ったように見えた。彼はやせて表情が表に出るようになったように思えた。あの無邪気な笑みは消え、挨拶で見せたはにかんだような不信感にあの無邪気な微笑みの痕跡はなかった。重々しい感じになり、より男性的で、素朴なところはかなりなくなっているようだった。気取った柄の新しい服を無造作に身につけていたが、服には泥がついていた。燃えるようなオレンジ色のネクタイをしていて、それが彼の美しい肌の色と惚れ惚れするくらい似合っていたのを私は覚えている。明らかに彼は大きく変化していて、それはまるで彼が世界一周の旅をしてきたような変わり方だった。私は手を差し伸べて私のことを覚えているか聞いてみた。

「もちろんですよ！忘れるはずないじゃないですか」と彼は叫んだ。彼の声さえ変わってしまったように聞こえた。重たく耳ざわりな感じがした。彼は私たちに恨みを持っていた。彼はどのように自分の無知に気づいたのだろうか。彼は黙って非難の目を向けていた。それは半分訴えかけてくるような、半分不吉なことの前兆のような目つきだった。あれ以来、あの割に合わな

い取り引きのことをずっと考えていて、間違っただけをしてしまったという感覚がある種の息のつまるような恐怖に変わってしまっていた。私はこういったことすべてを胸が痛むような哀れみとともに見て取った。というのも、あの皇帝の沈み彫り以上に貴重な何かを彼は手放してしまったように私には見えたからである。

彼はあの少年のような無邪気さを失ってしまったのだ。あそこであんなにも気持ち良さそうに花々の中に頭を入れて寝ていることを可能にしていたあののどかな心の平静を彼は失ってしまっていた。しかし、怒りの中でさえ彼は相変わらず単純な人物だった。「もう一人の——あなたの友人はどこにいるのですか？」と彼は尋ねた。

「宿にいるよ——まだローマにいるんだ。」

「それであの石は——彼はあの石をどうしたのです？」

「何も。まだ持ってるよ。」

彼は悲しそうに首を振った。「あの石を二十五スクードで返していただけないでしょうか？」

「残念だけど無理だと思うよ。とつても大切にしているから。」

「そうでしょうかね。見せてくれるでしょうか？」

「それは彼に聞いてみないとね。彼はあれを誰にも見せないんだ。」

「盗まれるのを恐れているんですね？それであれの価値がどれだけなのか分かりますね！あの方はあれを宝石屋さん——あの、何て言うんでしたっけ？——宝石細工職人？——にも見せていないのですか？」

「誰にもね。そのことでは僕を信じてもいいと思うよ。」

「でも、きれいにして、磨いて、あれが何か分かったでしょ？」

「とても古いものだね。正確には分からないけど。」

「とても古いものです！もちろん、とても古いものです。あの石には私にスクード銀貨をもたらした以上の年月があります。あれはどんな風に見えます？赤く見えますか？青色ですか？緑色？黄色？」

彼は探るような視線を私に向けて、すぐに次のように言った。「あれはトパーズなんです。」

「そうだよ。トパーズだ。」

「それに何か彫られていたでしょう——僕は確かに見ました！あれは沈み彫りなんです。それを何と言うか知っていますよ。僕はそのためにずいぶん犠牲を払いましたからね。あの模様は何でした？王様の頭ですか——多分、ローマ法王の頭でしょう？それとも物語に出てくる有名な美しい女性の肖像ですか？」

「あれは皇帝の模様だったよ。」

「何という名前です？」

「ティベリウスさ。」

「ええ！」彼の顔は真っ赤になり、目は怒りの涙であふれた。

「さあ」と私は言った。「あの石を手放しちゃったことを後悔するのは分かるよ。誰かが君に話して納得がいかなかったんだろう。」

「それこそみんなですよ！僕はどうしようもない馬鹿で、何て馬鹿なことをしたか黙っておけないんだと。十一スクードを持って帰って、使い切れないくらいの金を持っていると思っていたんです。最初にしたのは行商人から金メッキの髪どめを買って、それをニネッタにプレゼントしたんです——村の女の子で仲良くしていたんです。その子はそれをおさげに挿して、鏡で自分の様子を見ていました。それから、どうして突然僕がこんなにお金持ちになったのか聞くんです！それで『そうさ、僕は君が考えているよりお金持ちなんだ』って言ったんです。それで持っているお金を見せて、石の話をしたんです。その子はとても頭のいい子で、頭のいい奴がちょっと一言いえばすべて分かっちゃうんです。彼女は私に面と向かって大笑いし、私が何てまぬけで、あの石には少なくとも五百スクードの価値はあっただろうし、その外国人はひどいペテン師だって言うんです。私はそれを持って帰ってきて、兄や信頼できる人に見せるべきだったって。結局、彼女の言うことは正しかったんです。私は大きな富を手にしてはいたのに、それを犬に与えてしまったんです。彼女はこのありがたい話を終わらせようと、頭から髪どめを外してそれを私の顔めがけて放り投げたんです。彼女は二度と私に会おうとしませんでした。そんなことするくらいなら、道端で出会った目の不自由な乞食と結婚する方がましだと考えたのだと思います。私に何が言えるでしょうか？彼女には、ローマで貴婦人——公爵夫人なんです——の侍女をしている姉がいるんですが、その夫人が、ローマ平原で見つかった古い宝石で作った高価なネックレスをお持ちなんです。僕はうなだれてその場を立ち去り、自分の愚かさを呪いました。僕は自分の金を地面に放り投げて、その上につばを吐きかけたんです！フォリエッタを飲み酒場に行きました。そこで三、四人の知り合いに会ったんです。僕はみんなに酒をおごって回りました。自分の持っている金が憎くて、全部使ってしまったかったんです。もちろん彼らもどうして僕がそんなに羽振りがいいのか知りたがりでしたよ。ですから正直に話したんです。あのニネッタのような雌ギツネよりはもうちょっとましなことを言ってくれるんじゃないかって願ってましたけど。でも、彼らはグラスをテーブルに叩きつけて声をそろえて僕のことを馬鹿にしたんです。どんな間抜けなロバでも、草をはんでいるときにそれだけの宝物を鼻で掘り出したら、口にくわえて飼い主のところに持って帰るだろうに。何の慰めにもならない慰めでしたよ。僕はワインで怒りを流し込み、瓶を次から次へと空にしていきました。生まれて初めて酔っ払いましたよ。あの夜は最悪でした！次の日、私は残った金を叔父のところを持って行き、それを貧しい人たちに与え、教会のために新しいろうそくを買い、そして不敬な僕の魂を償うためにミサの言葉を述べるよう頼みました。叔父はその金を真剣に見つめて、それを邪な方法で手に入れたのではないのだろうかと質しました。僕は叱られる覚悟ができていましたので、彼にもすべてを話しました。叔父は眼鏡越しに僕を見つめ、黙って聞いていました。僕が話し終わると、叔父はその金を手の上でひっくり返し三分ほど目をつぶっ

て座っていました。突然叔父はその金を僕の手押し返して、『取っておきなさい——取っておきなさい』と言いました。『おまえのおつむじゃ食べていくのにも困るじゃろ。手にしたものは最大限に活用するのじゃ!』分かりますか?それ以来、僕は熱にうかされているんです。失ってしまった富のことの他に何も考えられないんです。』

「富だって!」と私はとがめるように言った。「君はおおげさだよ。」

「僕にとっては富になり得たんです。それで一日中声が耳に響いて言うんです。千スクードは手に入れることができたって。」

私は思わず顔を赤らめたかもしれない。そして一瞬顔をそむけた。再びその若者の方に目を向けると、彼の顔は赤く照り輝いていた。「ティベリウスだって?ローマ皇帝が大きなトパーズに彫られていたんなら——僕には充分ほどの富です!あなたの友人はペテン師です——分かりますか?あなたがそうだとはいけません。僕はあなたの顔が好きですし、その気になればあなたは僕の力になってくれると信じています。しかし、あなたの友人は醜い怪物です。どうしてあんな男を信じてしまったのか分かりません。あの男がろくでもないことを考えていたことは分かっていました。でも、無害な人間がいるとしたら、それは僕だったのです。ああ!これが僕の運命なのです。そう言ってしまえば済むんです。だからそう言うのですが、しかし、空のコップがのどの渇きに何の役にも立たないのと同じように、そう言っても何の役にも立ちません。僕は自分の手のすることに責任が持てません。ほら——僕の手にはとても力があります。奴の首を絞めるなんて簡単です!もちろん、初めは丁寧な話しますよ。でも、あの男が僕を無視し、失礼なことを英語で言ったら、僕が考えるのは復讐のことだけでしょう!」彼は興奮した身振りで帽子を脱ぎ、それを地面に叩きつけ、額の汗をぬぐいながら立ち上がった。

私は短くしかし十分誠意を持って彼に言った。このことは私に任せて、君はラリチアへ帰って、この怒りを鎮められるような何か仕事を見つけるのだ、と。しかし正直に言うと、この立派な忠告を口にしながらも、私は自分の言っていることに半信半疑だった。試練に耐えて美德を手にするなんて気の毒なアンジェロの知ったことではなかった。直接的な感情には活動的になる彼の怠惰な性格にとって、健全な労働に対する私の提案は、自分自身の失敗以上に我慢できないものに思われただろう。彼は悲しそうに私を見つめて何も答えなかったが、私が彼のことを気にかけていることは分かったようで、少なくともローマを去ると約束し、彼の言い分について私は何らかの申し立てをすることを信じると言った。もし彼に何かいい知らせがあれば、ラリチアの彼に連絡することにした。そうして初めて彼のフルネームを私は知った。アンジェロ・ビーティ——それはまさに、その名前の持ち主には災いに対する魔除けとなる名前だった。

II

私がアンジェロと会ったことを話し始めると、サム・スクローブは極端に苛立った様子を見

せた。公平性に対して強い敵意を持つ彼の心の奥深くには、依然として何か不愉快なものが存在することが分かった。愛する人を得た者としての幸福感でさえ、情け深く譲歩しようという気持ちを彼にもたらしめていないことはいかにも彼らしかった。彼は自分が得たものを自分の私物のようにあつかい、食べることができないごちそうがあっても親切心でそれを人にふるまうことがないのと同じように、それを他人と分かち合おうという気持ちはまったくなかった。しかしながら、もし私が、アンジェロと会ったことをあれほど無遠慮にこと細かに伝えていなければ、アンジェロの言うことにも一理あることを、彼はたとえしぶしぶであったにしろ認めていたかもしれない。私は、あの気の毒な青年のどこか美しい悲劇的なところに心を打たれており、その美しさに完全な公平さを期すために、彼が挑戦の印として帽子を地面に投げつけ、復讐について語ったことをスクロープに話した。それを聞いたスクロープは、ひどく不愉快な様子で、彼のことを芝居がかった生意気な奴だと決めつけた。しかし、二日後にアンジェロと会って話をするというのを私に言づけた。スクロープがアンジェロに会うことにも驚いたが、私がそこで見たのは、その件については不愉快な事柄を回避しないでおこうとスクロープが真面目に努力していることだった。「彼をこの家に入れて大声を出させるわけにはいかないよ。僕もコロシウムで彼と会おう」と彼は言った。彼が時間を指定したので、私は正確ではないかもしれないが丁寧なイタリア語で三行の伝言をラリチアに送った。

彼らは会わない方が良かった——はるかにその方が良かった。帰って来るやいなや、二人の間に何があったか繰り返させないでくれと、スクロープは私に要求した。アンジェロは厚かましい青二才で、僕はもう二度とアンジェロのことは聞きたくないと言うだけで十分だろうと彼は言った。アンジェロはいくらかでも代償を受け取ったのか？とついに私は聞いた。「一ファージングも受け取らなかったよ！」とスクロープは叫び、部屋から出て行った。明らかに、二人の青年はお互いにとって軽減することのできない不快の源泉であった。アンジェロは礼儀正しく接すると約束していたので、彼は約束どおりにしたと私は信じたい。しかし、まさしくアンジェロの外見の変化がスクロープの同情心にあまりにも一方的に挑んでいるように思われたので、スクロープは脅されているような気持ちになりいらした。スクロープの態度には人を馬鹿にしたようなところがあり、彼のぎこちない不躰なイタリア語は明らかに彼を実際以上にそう見せた。蔑んだような態度でイタリア人とつき合うことなど不可能である。イタリア人を良く知る人は、表面的にほどよく譲歩することで何がなし得るかを学んでいる。アンジェロは怒りを込めて対応し、あとで私は知ったのだが、受け取った金と引き替えにトパーズを返すよう権利として要求した。スクロープも反論し、アンジェロがそんな話し方をしても得るものは何もないと言うと、傷ついた若者は向こう見ずで侮辱的な脅しで対抗した。なぜ殴り合いにならなかったのか私には分からないが、明らかにスクロープの側にひるむようなところはなかった。スクロープと面と向かったとき、彼の首を絞めるのはそんなに容易なことではないようにアンジェロには思えた。イタリア的な情熱と混じったわずかな分別が、復讐は延期せよと若者

にささやいた。メロドラマ的な見方をしなくても、スクロープには不吉な出来事が待ち受けているように私には思われた。暗いアーチ形の入り口にひそむマント姿の暗殺者を明確にイメージしているわけではなかったが、アンジェロが自分自身に対して耐え難いほど不愉快な気分になっていることは十分あり得ると思っていた。ローマのあちこちで、彼の話を耳を貸してくれる人には誰にでも彼が話しをすることはあまり好ましいことではなかったが、スクロープにとって都合が良かったことは、宝石の持ち主がそれについてほとんど自慢しないので、たいていの人はその宝石の存在を信じなかったことである。いずれにせよ、この状況全体が私を極度に神経質にした。スクロープをシャイロック以上に強欲なユダヤ人だと呪う日があると思うと、次の日には道徳的幻想の犠牲者だと彼のことを哀れんだ。時間さえ経てば、彼は分別を取り戻すに違^いなく、利息をつけてアンジェロに支払いをするだろう。しかしながら一方、私にできることは何もなかった。というのも、スクロープに危険が迫っていると忠告することは無駄である以上に意味のないことのように感じていたからである。イタリア人がわめいているので、自分が進む道を少しでも迂回する必要があるなどとは彼は思いつきもしなかっただろう。

アンジェロの「軽率な行為」のせいで、沈み彫りのことは誰にも言わないという誓いから全体としてスクロープが解放されたのかどうか私には分からない。いずれにせよ、数日後の夜、ワディントン嬢のちょっとした言葉で、スクロープがトパーズについて誓ったことに留保をつけていたことを思い出した。ワディントン嬢はピアノに座って新しい作品を何とか弾けるように苦勞していた。謎解きを謎解きとして好むスクロープは、半分ふざけながら彼女を指揮し間違いを正すふりをしていた。「私見たのよ」と見開いたまじめな目でアディナは私に言った。「あの素晴らしいトパーズを見たわ。あなたはその秘密を知っていると彼が言ってるわ。彼がそれを手にしたいきさつを話して下さいませんか？ 真っ当な方法で手に入れたことを願っていますわ。」

私は笑おうとした。「アンティークをあさる男の真っ当さなどあまり熱心に調べない方がいいですよ。ぶら下がっている浮き彫り細工や嗅ぎ煙草入れを扱うのも、スリが財布を扱うのも、真っ当さという点ではあまり変わりませんからね。」

私がまるで本当に残酷な冗談でも言ったかのように、恥ずかしそうに驚いて彼女は私を見た。「そのうちそれをメダルのように首からかけるよう彼は言うのですが、私はそのつもりはありません」と彼女は言った。「宝石はきれいだと思うのですが、ティベリウス皇帝をあんな胸の近くにぶらさげるなんてひどく落ち着かないと思いますわ。ティベリウス皇帝ってひどい皇帝の一人——最悪の皇帝の一人ではなくって？ その彼が見て触ったものをこんな風に直接身につけるなんてほとんど不潔と言ってもいい行為だわ。私にとっては皇帝の図柄は宝石の美しさを損なうようなものですわ。スクロープさんがそれを見えないところにしまっておいていただいて本当にありがたいと思っていますの。」この発言はニューイングランド出身のブロードのお嬢さんの精神としてはとつても品のあるもののように思われた。

日々は何事もなく過ぎ、アンジェロの「復讐」はまだ実行されないでいた。ローマの薄暗い

通りの小さな曲がり角でスクロープが死を迎えたわけでもなかった。毎晩十一時に彼は規則正しくやって来た。私たちの悩める友は、楽をして満足するように作られた性質の邪悪な力をすでに使い果たしたのではないかと私は思った。そのように望みもしたが、私は間違っていた。ある日の午後、私たち——ワディントン母娘、スクロープ、私——は美しいボルゲーゼ公園に散歩に出かけた。社交界の騒がしさとその娯楽から逃れるために、朽ち果てた古い壁や細くて黒いセイヨウヒノキや、まだ人に踏みしめられていない草むらが、美しいローマの空の下で絵画的な調和美を織りなしている片隅へぶらぶらと歩いて行った。そこはあまり人が立ち入らない場所だった。もちろんそこには苔で覆われた半円形の石造りの建物が近くにあり、グリユプスの足で飾られたひび割れたベンチがあった。そこで人は腰かけ、おしゃべりをし、陽の光の中で素早く走り去るとかげを眺めたりするのである。私たちが三十分もそんなことをしていたとき、アディナがセイヨウヒノキの根もとでちらちらと輝くその年最初のスマイルを見つけた。彼女は急いで立ち上がり、それを摘み取ると、それに仲間を加えるつもりでさらに奥まで歩いて行った。草の上に長い影を引きずって、スマイルを探して可愛らしく左右に首を振りながらゆっくりと歩いて行くのをスクロープは座ったまま眺めていた。私には分かるのだが、彼女と一緒にスマイル探しに行こうという衝動をスクロープが感じていなかったというわけではなく、自分の座っているところから彼女を眺めるということに、一瞬、恋に落ちていたのだ。スマイルを探しているうちに彼女はかなり遠くまで行ってしまい、曲線を描く公園の壁の後でとうとう姿が見えなくなった。しばらくしてワディントン夫人がアディナを探しに行った方がいいと提案したので、私たちは歩き始めた。私たちの目の前に彼女が再び姿を現したとき、私たちはそんなに長く歩いていたわけではなかった。動揺を抑えたような態度で後を振り返りつつ彼女は私たちの方に歩いて来た。彼女が誰かにつけられていることはすぐに分かった。男が一人彼女のすぐ後にいた——二度目にその男を見たとき、それがアンジェロ・ビーティだということが分かった。アディナが青ざめていたので、二人の間に何かがあったことは明らかだった。彼女が私たちと一緒になったとき、私たちもアンジェロに面と向かっていた。彼も青ざめていた。そして、青ざめた二人の間で、スクロープは顔を真っ赤にしていた。私は二人が取っ組み合いを始めることを恐れて、それを防ごうとアンジェロの方に近づいた。しかし驚いたことに、彼は明らかに違った手段に出た。曇った明るい目を私たち一人ひとりに向け、私がまだ口にしていない非難に答えるかのように手を空中に掲げ、次のような言葉を発するかのようだった。「私を放っておいて下さい。私は自分が何をしているのか分かっています。」私はスクロープにワディントン母娘を連れて行きアンジェロは私に任せるよう目くばせをした。ワディントン嬢は立ち止り、穏やかな関心を持ってアンジェロを見つめていた。彼女を連れて行こうとして、スクロープはほとんど乱暴と言っていいくらいに彼女の腕をつかんだ。彼女が彼と立ち去るとき、かすかに彼女の顔色が赤くなるのを見た。ワディントン夫人はまったく悪意には気がつかず、男前の若い男性を目の前にしているだけだった。「スケッチに描けばどれほど美しく見えることで

しょう！」と継娘のあとを追いつつ彼女が興奮して話しているのが聞こえた。

「面倒なことを引き起こすつもりはないんです」と憂鬱そうな笑みを浮かべてアンジェロは言った。「怖がらないで下さい！礼儀ぐらいわきまえているつもりです。この三週間ローマをぶらぶらしている間に、紳士はいかに振る舞うべきか学習しました。あの若いお嬢さんはどなたですか？」

「ねえアンジェロ、君には関係ないことだろう。まさか彼女に話しかけるといふような馬鹿なことはしていないだろうね。」

一瞬アンジェロは黙って、同行の男性の腕につかまって立ち去って行く彼女を目で追っていた。「もちろん、話しかけましたよ——そしたら、僕のことを分かってくれました。落ち着いて下さい。お嬢さんが聞いてはいけないようなことは何も言っていません。しかし、それでも彼女は分かってくれたのです。彼女はあなたのお友だちの友だちでしょう。それは分かりました。木の後からあなたたちを三十分ほど見ていたのです。彼女は素晴らしく美しい方だ。さようなら。あなたたちに危害を加えるつもりはありませんよ。でも、あなたのお友だちには言うておいて下さい。僕は彼のことを忘れてはいないと。僕はただ機会を待っているのです。そのうち機会は訪れると思います。僕は彼を殺したいわけではありません。ただ彼には苦しみに耐え抜いて苦しみを感^じて欲しいのです——永遠に！」彼は振り向いたが、立ち去らずにスクロープたちが見えなくなるまでじっと見つめていた。そしてついにある種不自然な冷たさを込めて言った。「彼は自分の取り分以上の幸運を手にはしています。トパーズ——そして真珠！一度に両方を！それでは、さようなら！」彼は手を振りながら急いで立ち去った。私は何も言わずそのままにしていた。納得したわけではないが、彼の思いがけない冷静さのせいで私は何も言えなかった。

驚くようなことが起こるとき、私たちはそれに先立つ正確な兆しや前触れを思い出そうとすることで多くの時間を無駄に過ごしがちである。そして、それらの前兆が納得できるほど見当たらないときは、ためらわずにそれを頭の中で作り上げるものだ——事実にもとづいてでっち上げるのである。ゆえに、ここから先、口数の少なくなったアディナの何となく奇妙なところに特に気がついたふりを私はしな^いつもりである。彼女のこととはどことなく無邪気に奇妙な存在だと常に私には思われていた。彼女の生活における日々の静かな動きの中で、神秘的な雰囲気「あなたは私のことを半分もお分りになっていないわ！」とささやいているような感じがすることが彼女の魅力の一部だった。多分、平凡な私たち三人には彼女のことを知る価値もなかったのだろう。しかし、もしある日、ワディントン嬢が何も言わず席から離れたあと、世知にたけた男がワインを飲みながら、彼女こそ近い将来友人たちに最高の驚きをもたらしてくれる女性だとささやいてくれたら、私は彼の袖に手をかけ、よくぞ私の考えていることを表現してくれたと微笑んで言っただろう。彼女はいつもより静かだったのだろうか、何かに気を取られていたのだろうか、気分がすぐれなかったのだろうか、落ち着かなかったのだろうか？彼女

はまさしくこれらすべての気分を感じていたに違いない。それでも、見る目のない人にとっては、彼女は単なるブロンドの髪をしたお嬢さんで、話しをするよりは微笑むことの方が多く、恋人からの献身を上品な魅力で受けとめ、その振る舞いはへりくだっているというよりは謙虚な印象を与えるものだった。あの若いイタリア人がワディントン嬢に話しかけたと言ったことをスクロープに繰り返すことは私には意味のないことのように思えた。また気の毒なサムは、アンジェロが彼女に話しかけたという事実について彼女を問い詰めたことも、彼女がそのことについて彼に何か言ったということも、どちらも私にはほのめかさなかつた。しかし、その質問と答えというやりとりの中で、ワディントン嬢と彼との間に何かあったに違いないと私は確信していた。そして私は、ワディントン嬢は彼のことを分かってくれたとアンジェロが言ったとき、一体それは何を意味していたのだろうかと思ひかきながら考えていた。彼女は何を理解したのだろうか？明らかに、スクロープがああ宝石を手に入れたときの話ではないはずだ。というのも、仮にアンジェロにそれを話す時間があつたとしても、アディナがその話について率直に説明を求めているのは不自然だからだ。そこでついに沈黙を破り、私は、ボルゲーゼ公園で会った男前の若者とあんな沈み彫りを結びつけるだけの理由がワディントン嬢にはあると、彼が考えているのかどうか尋ねてみた。

私の質問は明らかに彼を不快にした。「男前だって？」と彼は怒鳴った。「彼女が奴のことを男前と言ったのか？」

「そうじゃないよ。でもそうだろう！少なくともその点については認めるだろう。」

「一週間も髪をといたことのないような奴のことか——君の言っているのは、それがアディナが感じている魅力かどうか疑わしいね。でも、明らかに」と彼はしばらくしてつけ加えた。「どういうわけかトパーズは気に入らないようだ。彼女はあんなティベリウス皇帝のせいであんな宝石が気に入らないと言うんだ。歴史上の反感が少し影響を与え過ぎているんだ。魅力的な女性にとって、美しい宝石を台無しにできるものなど何もないと思っていたんだけど。あんな悪党はどうやら彼女と話したようだね」と彼はついに言った。

「彼は何を言ったんだい？」

「僕と婚約しているのか聞いたみたいだ。」

「それで彼女はなぜ答えたんだ？」

「何も。」

「怖かったのかもしれないね。」

「そうかもしれない。でも、そうではなかったって言ってるんだ。奴が怖がらないでくれって言って、自分のことを正義を求めているだけの気の毒で無害な男だと言ったそうだ。彼女は何も言わずにその場を立ち去ったそうだ。僕は彼女に奴は頭がおかしいんだと言ったのさ——それは嘘じゃないだろう。」

「多分ね！」と私は言った。それから、最後の試みとして私は次のように言った。「君も完全

にまともというわけではないと言っても、それもまったく嘘だとは言えないだろ。君もトパーズについては相当常軌を逸しているし、頑固さもある状況の下で一線を越えれば危険なほど狂気に似てくるものさ。」

仮に頑固者を理屈で諭すことができても、人が彼のことを頑固者と呼んでいることを知るとその頑固者はさらに頑固になるだけなのである。スクローブはぞっとするような笑みを私に向けた。「君のいうある状況というのを僕は否定するよ。もし僕が狂人なら、自分は正気だと信じている狂人の特権を要求するね。僕に説教するつもりなら、僕がまともな瞬間をとらえなくちゃだめだ。」

目に見える影響を暗くて古い町に与えるローマの初春の空気は、ご存知のとおり不思議な魅力があるけれども、どちらかという外国人の体にはしばしば辛いことがある。北アフリカからの熱風が二週間途切れることなく続いたあと、ワディントン夫人の活発だった気分が落ち込んだ。彼女は「熱病」にかかるのではないかと心配し、急いで医者と相談した。医者は、何も心配することはなく彼女に必要なのは単なる気分転換だと言った。そして、一ヵ月ほどアルバーノに行くことを勧めた。というわけで、二人の女性はスクローブの付き添いのもとアルバーノに行くことになった。ワディントン夫人は親切にも私も一緒に来るよう誘ってくれた。しかし、親戚の者がローマにやって来るようになっていて、私は彼らのためにガイド役を引き受けることになっていたの、ローマに残っていなければならなかった。機会があればアルバーノを訪れると約束だけはしておいた。私の叔父とその三人の娘は申し分のない観光客で、私には次から次へとすることがあった。しかし、週末にはやっと約束を果たすことができた。私は宿に泊まっている彼らを発見し、二人の女性が、汚れた石造りの床としわの寄った黄色いテーブルクロスについての意識を、窓から見える霧のかかった海のように広大なローマ平原についての恍惚とした黙考に溶け込ませているのを見た。景観は別として、彼らは楽しい日々を過ごしていた。その地域の美しさと山間の見慣れない古い町の美しい近郊を思い出していただきたい。その地方は早咲きの草花が咲き誇っており、私の友人たちは野外の空気の中で暮らしていた。ワディントン夫人は水彩画のスケッチをし、アディナは野生の花々を摘んでいた。スクローブは満足気に二人の間を行ったり来たりして、時折、ワディントン夫人の絵の具の使い方やアディナのスイセンとシクラメンの組み合わせについて歯に衣をさせない酷評をしていた。みんなとても幸せそうで、嫌味ではなく私はもう少しで、神々からのもっとも望ましい贈り物とは、自身の欠点のなさに対する終始変わらない確信ではないかと思うところだった。しかも、心によましいところのある恋人でさえ、アディナ・ワディントンのような自分の人生における予想もしない愛らしさの存在によって、当然の報いというものが存在することが信じられなくなるということがあるのかもしれない。

私はその夜をアルバーノで過ごした。しかし、次の朝はローマにいる私の美しい従姉妹たちと礼拝に行く約束をしていたので——「美しい」というのはレトリックだが、彼女たちは素敵

な女の子だった——私は夜明けとともに起きて出発しなければならなかった。スクロープは朝食までに宿に戻るから途中まで送って行くと申し出てくれた。しかし、その有難迷惑な申し出を断って夜明けの薄明かりの中を一人で出発した。乗り合い馬車ががたがたとローマ平原を横切って行った。郵便局までは歩いて五分の距離だった。その間、荷物を積み込むために馬車は停まっていた。少し近道なので、宿の小さな庭を私は抜けて行った。砂利の上を歩く私の足音を聞いて、ところどころ欠けた部分のある不気味な彫像の足元のベンチから人影がゆっくりと立ち上がった。とそのとき、アンジェロ・ピーティをじっと見つめている自分に気がついた。私は驚いて彼に挨拶をした。しかし、それは事実上なぜ彼がそこにいるのかを問いたがすものだった。彼はそこに突っ立ったまま、妙に挑むようなきっぱりとした笑みを浮かべて、私の方をじっと見ていた。そして、何をしているのかと私が繰り返し尋ねるのに対して、近所の人の庭を散歩するくらいの権利はあるんじゃないかと思ったと答えた。

「近所の人？」と私は言った。「いったい——？」

「ああ、だからさあ！僕はラリチアに住んでるだろ？」そして、草原でぐっすり昼寝をしていた彼を起こしたときとほとんど同じように素朴に笑った。

アンジェロが不在の間、私には考えることが他にたくさんあったので、スクロープが敵の手の内に陥っていることなど思いもよらなかった。しかし、結局のところ敵といってもまったく害はないと思い始めていた。アンジェロの陰謀がマラリアに罹る時間帯に湿った庭で待ち伏せすることなら、初めに被害に遭うのはスクロープではないだろう。傷ついた彼の気持ちは彼を一人前の男にしただろうと当初私は考えていた。しかし、世間との一種ロマンティックな孤立感が今だに彼の周りに漂っているような感じがした。痛みをともなう成熟への衝動はたった一日しか続かず、彼は再び理想郷の怠け者となってしまっていた。しかし、仮にそうでも、ローマの夜露のものともしないだけの理想郷人の体質だけは持ち合わせていたに違いない。「もちろん、理由があってここに来たんだろ」と私は言った。「こんな馬鹿げた仕方ですらで夜を過ごすことを正当化するくらいだからよっぽどの理由だろう。油断し熱病に罹って死んでしまったら、それですべては終わりだからね。」

私が彼の健康のことを心配したので感謝しているようだった。「いえいえ、あなた、僕は熱病なんかには罹りませんよ。私の熱はここにあるんです。」——彼は胸をたたいた——「ここにある熱はもう一つの熱に対する安全装置なんです。もちろん、ここに来たのには理由がありますが、あなたは決して思いつきもしないでしょう。放っておいて下さい。あなたを傷つけるつもりはありません！でも、もう陽が明るくなってきましたから、行かなきゃなりません。見られたくないのです。」

私は彼の腕をつかみ、彼をじっと見つめて真意をつかもうとした。彼は率直に私の目を見て満足そうに少し笑った。彼の秘密が何であれ、そのことを彼は恥じてはいなかった。その秘密のおかげで彼が忍耐強くいられることがある種の満足感とともに私には見て取れた。それと同

時に、彼の本質について彼の顔つきが私にもたらした印象の中で、それが私に再認識させたことは、少し前の私の仮説がそれと矛盾しているということだった。そこには邪悪なものや悪意はなく、ただ、成功についての神秘的な予知の中で当面は休眠しているように見える深く執拗な自然の欲望が存在するだけだった。彼は自分の顔つきがあまりにも多くのことを語ってしまったと思ったらしい。また少し笑って軽く口笛を吹き始めた。「君はこんなところを強盗のようにこそこそ動き回るような人間じゃない。アメリカに来て何かまともな仕事をする気はないかね？」と私は言った。私は一瞬、目標に向かって頑張っている彼に手を貸し、金物店を営んでいる義理の兄に紹介状を書くというおかしな想像をした。

彼は帽子をとり、手で髪をかき上げた。「では、あなたは、私に何かもっとましなことができるとおっしゃるのですか？」

「もしその気ならね！もし君が『復讐』というくだらない考えをあきらめて、不正を被ったという意識を時間の力にゆだねるのならね。」

「あきらめるですって？——不可能です！」と彼は顔をこわばらせて言った。「あきらめるくらいなら腕をちょん切った方がましです。同じことでしょう。それも私の命の一部です。僕は時間にゆだねました——僕は四ヶ月も待ったのです。そして今だに最初と変わらず貧しく無力のままここに立っているのです。だめです。犬のような扱いを受けるのはごめんです。もし彼が公明正大であったら、彼のためにどんなことでもしたと思います。私は悪人ではありません。不親切な気持ちなど持ったことがないのです。確かに少しばかり単純で、まぬけで、貧しくみすぼらしいことにあまりにも甘んじていました。神はなさりたいようになさるのです。私に少し喝を入れる必要があると神は考えられたのです。間違いなく私は喝を入れられました！しかし、あなたの友人は神の意見をお聞きになったのでしょうか？そんなことがあるはずはない！彼は自分自身の身勝手さだけと相談し、甘いところだけを手に入れ不味いところには手をつけない利口な人間だと自分のことを考えたのです。しかし、彼は不味いことも経験をするでしょう。そしてそれが私の甘い経験となるのです。」

「たいそう立派な話だ。それがどういう意味なのか三語で分かりやすく説明してくれ。」

「お待ちなさい！——ローマに馬車で行かれるのでしょうか。もう行かれた方がいいと思います。席が取れないかもしれませんよ。またお会いすることがあるように思います。」彼は立ち去り、しばらくして庭の大きな鉄の門がきしみながら開く音が聞こえた。

私は困っていた。スクロープとワディントン母娘のところ立ち寄りしたい気持ちがある一方で、彼女たちを不愉快なことから守る確実な方法があるわけでもなかった。他方で、私はローマに戻ることを確実に期待されていた。それに、アンジェロの計画——それが実体のあるものであれ影のようなものであれ——を勝手に展開するようにしておけば、立ち込めている暗雲はそれだけ早く晴れないだろうか？結局、私はローマに帰った。しかし数日の間、何か醜いこと、何か悲しいこと、とにかく、何か妙なことがアルバーノで起こっているのではないかという疑

念につきまといわれた。ついにその疑念があまりにも大きくのしかかってきたので、私は小型の馬車を雇い再びアルバーノに戻った。午後遅く宿に到着したが、スクロープたちに宿で会えるかどうか分からなかった。実際、彼らは散歩に出かけていて、宿の主人も彼らの行先を知らなかった。彼らが帰って来るまでその小さな汚い町をぶらぶらす以外にすることがなかった。アルバーノ湖のほとりのカプチン派の修道院を覚えておられるだろうか？私はそこまで歩いて行った。教会の入り口がまだ開いていたので、私は中に入って行った。夕暮れが教会の隅に忍び寄っていたが、何か信仰上の儀礼か、多くのろうそくの灯りで祭壇は明々と照らされていた。薄暗い中で、ろうそくの灯りは絵のようにきらきらと輝いていた。あちらこちらでひざまづいた人影がぼんやりと自らの存在を示していた。それは組み合わせられた明暗が織りなすちょっとした作品だった。私は座ってそれを楽しんでいた。しばらくして、私の近くに座っている若い女性が熱心に祈っている姿に気がついた。手は膝の上に組んで置かれていた。顔は上を向き、奇妙に開いた目は光輝く祭壇を見つめていた。ご存知のとおり、私たちは家庭の暖炉の輝きの中で様々なことを想像するものだ。この若い女性はろうそくの光の中で恍惚とするような啓示を読み取っているように見えた。彼女の表情がとても特異で、それが彼女の正体を偽装していたので、自分がアディナ・ワディントンを見ているのだという認識は突然の衝撃とともにやって来た。私は彼女の同行者を探したが、彼女は一人のようだった。彼女をこっそり観察する権利は私にはないように思えたが、彼女に声をかける気にも黙って立ち去る気にもなれなかった。夕闇がせまっていた。彼女に連れがいないとはどういうことなのだろう？彼女は残りの人たちを待っているのだと私は結論づけた。多分スクロープは、ご婦人たちには許されない特権、つまり、修道院の庭のテラスから夕日を見るために中に入って行き、ワディントン夫人はスケッチのためのメモをとるために教会の外をぶらぶらしているのだろう。私は向きを変え教会の側壁に沿って反対側にいるその若い女性に近づいた。今度は私が近づいてくことに彼女が気づいた。祭壇から目を離して私の方を向き、しばらく私の顔を見つめていたが、どうやら私だと気がつかなかったようである。しかし、ついに彼女がゆっくりと立ち上がったとき、彼女が私に気づいたことが分かった。彼女はカトリック教徒になり異端者である友人たちと袂を分かち準備をしているのだろうか？

私は彼女に挨拶をしたが、彼女は極度に深刻な面持ちで私を見つめ続けていた。それはまるで彼女の思考が軽率な美辞麗句を彼女に超越させるかのようだった。彼女には観察されていたことで動揺したようなところ——私はそのことで彼女が動揺しているのではないかと恐れていたのだが——はまったく見られなかった。彼女は何か深く気を取られ夢中になっていた。アルバーノで何か妙なことが起こっているのではないかという私の疑念は見たところ当たらずも遠からずというところだった——「ねえ、お嬢さん、こんな寂しい教会で何をしているのですか？」と私は不意に尋ねた。

「啓示が得られるように祈っていたのです」と彼女は言った。

「お望みのものが得られたのなら良かったのですが！」と微笑みながら私は言った。

「ええ、私もそう思いますわ！」彼女はそう言って入口の方へ向った。「私は一人なのです。送って下さらない？」と彼女は言った。彼女は私の腕を取り、私たちは教会を出たが、教会の前で彼女は立ち止まった。「ねえ」と彼女は突然言った。「あなたはスクロップさんのとても親しいご友人なの？」

「彼がそう思っているのかどうかそれは彼に聞いて下さい。少なくとも私はその光栄にあずかりたいと思っていますが」と私は答えた。彼女の態度があまりにも真剣だったので私は少し気まぎらくなって、おどけることでその場をやり過ごそうとした。

「それでは答えていただきたいのですが、彼は失望に耐えられるでしょうか——激しい失望に？」

彼女は私に「大丈夫です！」と答えるよう訴えているように見えた。私は彼女が何か話したそうにしているのを感じたが、そうさせなかった。私は彼女を一瞬見つめた。彼女の真剣な目はどんどん大きくなり、彼女の顔全体が無言の祈りと変化したようだった。

「いいえ」と私はきっぱりと言った。「絶対無理です！」

彼女は重々しいため息をついて歩み続けた。彼女はもの思いに耽っているようだった。おしゃべりをしようという私の試みにはまったく関心を示さなかった。そのため、彼女が一人で修道院に行った理由を聞いたのは私たちが宿に到着してからだった。彼女の同行者はすでに戻って来ていた。彼らから歓迎の言葉をかけられたあとで、私は、彼ら三人は一緒に出かけたが、しばらくしてアディナが疲れたと言って宿に帰ることになったことを知った。「途中で疲れたら教会に立ち寄って休みます」と彼女は言った。彼らは宿に帰って来て彼女がいなかったことに驚いたが、私が彼女に出会ったことを知って安心した。彼らも彼女の何かいつもと違う雰囲気気がついてきたようだ。ワディントン夫人は無理に笑顔を作り、スクロップに笑顔はなかった。アディナは黙って針仕事をしていた。私たちは、彼女が「神経質」になっていることには疑いの余地がないことを暗黙のうちに認め合っていた。それは明らかによくあるような神経質さではなかった。彼女はうつむいて静かに刺繍を楽しんでおり、ほんのわずかな手の震えもなく糸を編んでいた。ついに夕食の時間になった。食事は何となく重苦しく終わったので、スクロップが煙草を吸いに庭に行こうと食後に言ったときは、その提案に感謝した。スクロップは気の毒に幸せではなかった。それは分かったのだが、アディナに何が起こったのか彼が直ちに話すことまでは期待できなかった。当然、彼女が婚約を撤回したいという意向を表明したのかもしれないことはすぐに頭に浮かんだ。そうではないのかと何回も彼に水を向けてみたが、彼にはその不安を口にする自信がないように思えた。話のきっかけに、私たちがラリチアの近くにいることに触れ、アンジェロ・ビーティの姿を見なかったか聞いてみた。

「何回かね」と彼は言った。「村ですれ違ったし、道でも五、六回会ったよ。ずうずうしい目つきで僕を見て立ち去るんだ。その暗く沈んだ目から脅すような視線を向けるのだ。僕が言っ

たとおり、奴にはどこかおかしなところがあるんだ！」

「彼も別に脅かすように睨んでいるわけじゃないだろう」とすぐに私は言った。「彼は夜になると宿の周りをうろうろし、君が寝ている間、庭をうろつき回っているだけさ。まるで、窓を睨めば、君は悪い夢にうなされると信じているかのようね。」そして、先日、明け方に彼と出会った話をした。

スクロープはひどく驚いて睨みつけ、こみ上げてくる怒りでゆっくりと顔を赤らめた。「あのまぬけなおせっかい焼きめ！ 奴がいつまでもその気なら、思い知らせてやる」と彼は叫んだ。

「金でも払って追っ払ってしまえよ」と私はきっぱりと言った。

「鞭を買って、奴の背中に打ちつけてやる！」

私はポケットに手を入れ、口笛を吹きながら立ち去ったと思う。何が起きようと、仲裁役はごめんだ！ しかしそれはいらだちではなかった。というのも、友人の柔軟性の欠如に対して半分理にかなった奇妙な哀れみの気持ちがこみ上げてくるのを感じたからである。彼は憂鬱そうに立って煙草を吹かしていた。私は、この件からまったく手を引いてしまったわけではないことを知らせるつもりで、結婚の日取りは決まったのか彼に尋ねた。しばらくして彼はそれがまだ未解決のまま、そうしておくことがワディントン嬢の望みなんだと答えた。

彼はすぐに答えたわけではないが、私をじっと見つめた。

「なぜそれを聞いたんだ——このタイミングで？」

「別に、ちょっとした好奇心さ——」と私は言いかけた。

彼は煙草の端を神経質そうに地面に放り投げた。

「いやいや、それはちょっとした好奇心というもんじゃないだろう！」と彼は叫んだ。「君は何か知っているんだ——何か疑ってるんだろう！」

彼が強く主張したので、私はそのとおりだと認めた。「あの美しい娘は動揺し、何かに心を奪われているように見えるのさ。君と何か口論したのではないかと思ったんだ」と私は言った。

彼は話をすることを促されてほっとしたようだった。

「あの美しい娘は謎だよ。いったい何が起こったのか分からんのだ。本当に訳が分からない。まったく不思議な娘だ。僕たちの幸せ——つまり結婚——に障害があるなんて思いもよらなかったよ。反対などしたこともなかったし、約束したんだ。これは彼女のやり方ではないし、彼女らしくないんだよ。彼女は常に控え目で従順でやさしく、わずかな愛情の表現にいつもとても感謝しているんだよ。この三、四日前まで彼女は今まで以上にそうだった。しかし、彼女からいつものやさしさはなくなり、身を引いて尻ごみし、まるで苦しんでいると言ってもいいくらいだ。私のちょっとした気遣いや心遣い、恋人同士特有の振る舞いを拒否し、それらのことがまるで彼女を抑圧し辱めているかのようで、もう少し軽く扱って欲しいみたいなんだ。直接知ったわけではないが、僕の過剰な愛情が問題なのではなくて、愛情そのものなんだ——僕が彼女を愛しているという、そして、彼女が婚約しているという事実そのものが彼女を苦しめてい

るのだ。それが分かったとき、僕は頭を殴られたような気がしたよ。いったい僕が何をしたというのか！女性とは理解し難い存在だよ。しかも、アディナは一般的な意味で気まぐれではないんだ。ワディントン夫人はそれは『女の子特有の気分』で、すぐに消えてなくなるから気にしないでいいと言うんだ。僕はずっと待ってるんだが、状況はまったく良くならない。君は何かあると気づいたんだろう、手がかりもないのに。これが恋の悩みというやつなのか？」しばらく考えこんだあと、彼は続けた。「自分がこんなに激しく恋をしているなんて分かってなかったよ！」

自分がどんな善意の愚かさで彼を慰めようとしたのか思い出せない。突然ワディントン夫人が現われて、彼をわきに引っ張って行った。夫人と少しぼそぼそと話したあと、彼は急いで宿に帰って行った。ワディントン夫人は私と一緒にその場に残っていた。夫人はとても困っているように見えたし、それ以上に、スクロープの状況とこれからの見通しについて私たちはこれまでも頻繁に話し合っていたので、私はすぐに、スクロープが自分の状況について語っていたということを彼女に話した。「まったく予想外だったのです」と彼女は涙ぐんで言った。「たった今、アディナは針仕事を終えて、スクロープさんと二人きりで会いたいと真剣な顔で私に言うんです。すみませんが、スクロープさんと呼びに行ってくださいませんか。私はいったいどうしたのか、スクロープさんに何を言うつもりなのか、あの娘に尋ねました。あの娘はまるで私が家族のお祈りの邪魔をしている五歳の子どもでもあるかのように私を一瞬見つめました。そして、ゆっくりと近づいて来てキスをし、私はすぐにすべてを知ることになるでしょうと言うのです。あの娘はあんな幽霊のように突っ立って、結局、スクロープさんとは結婚しないことに決めたと言うつもりなんじゃないでしょうか？あの気の毒な方は何をしたのでしょうか？」

「彼のことが好きでなくなったのでしょうか」と私は言ってみた。

「好きでなくなるって、こんなに突然？」

「おそらく、思っておられるほどそんなに急なことではないのでしょうか。若い女性の胸の中では、最初の印象が少しずつ訂正されていくように、そういうことが起こるのでしょうか。」

「ええ、でも何か具体的な動機がなければいけませんわ——別の恋とか。アディナが気まぐれなことは私も知っています。公平に言って、そもそもサムさんを受け入れたこと自体が気まぐれだったのです。しかし、あの娘が慎重に判断したとして、何があの娘の気分を損ねたのでしょうか？——一言で言ってしまうと、唯一考えられる説明は、あの娘が誰か他の方を好きになったということです。しかし、そんなことは不可能です！」

「絶対不可能ですか？」と私は尋ねた。

「絶対です。考えてみて下さい。いったい誰を好きになるというのです？あの娘はこの一ヶ月の間他の男性には会っていないのです。誰があの娘をこんなにも不思議に虜にすることができたというのです？毎朝みかんを届けてくれるあの小さな猫背の男ですか？多分あの娘はドリア王子に心を奪われたのでしょうか！王子はあそこのお屋敷に滞在していたのだと思います。」

この遠回しの皮肉を私は笑うことができなかった。私は考えていた——思いをめぐらしていた。「彼女は文字どおり誰にも会っていないのですか？」と、思考を中断して一息ついたとき私は尋ねた。

「あの娘が見たかもしれない人については分かりませんわ。目に見えるのですから。しかし、あの娘は他の誰とも話をしていませんし、話しかけられたこともありません。それは確かです。見ただけで恋に落ちるといのは——見ただけですよ——私が十五歳のときに夢中になった小説ではよくあることでしたけれど、それ以外のところでそんなことが本当にあるのか疑問ですわ。」

私はある疑問が舌の先まで出かかっていたが、あえて口にするのをしばらくためらっていた。しばらく黙って考えていたが、謝罪の言葉を先に口にしながら、とうとう尋ねてみた。「アディナの部屋は建物のどちら側にあるのですか？」

「どうしてですか？何を考えてらっしゃるの？」と夫人は言った。「こちら側よ。」

「庭に面しているのですね？」

「その二階ですわ。」

「失礼ですけど——どの部屋ですか？」

「三つ目の窓です——雨戸がハンカチで結びつけられているでしょう。」

突然、雨戸とハンカチに私は不思議な魅力を感じた。私はしばらくそれを見つめていた。そして、夫人の方にちらっと振り向いたとき、私たちの目が合った。そのとき彼女が何を考えていたのか私には分からない——つまり、彼女が何を考えているのかについて私が何と考えたのかということだが。それは小説の中で得られたものかもしれない——一目ぼれといったことである。それは、星の光に照らされた庭で、「不当な扱いを受けた」男前のイタリア青年と窓から外を見つめる空想好きなアメリカ人少女との間で交わされた言葉によらない対話といったものである。ワディントン夫人は、突然思いついた自分自身の印象からゆっくりと後ずさりしていくように思われた。体にまとったショールを寄せ集め、身震いをして宿の方に戻って行った。彼女に腕を差し出しながら私は言った。「明日、アルバーノを立つべきです。」

奥の階段の上で私たちは立ち止まった。ワディントン夫人はアディナとスクロープの話し合いの邪魔をすることに気が進まないようだった。どっちへ進もうかためらっているとき、彼女の居間の扉が開き、アディナが出て来た。スクロープは青い顔をして彼女の後に立っていた。表には出さないと決意した感情のせいで彼の顔は歪んでいた。アディナも青い顔をしていたが、彼女の目は風に吹かれている二つの松明のように明るく輝いていた。夫人の姿を認めると立ち止まり、うつむきためらってしばらくじっとしていた。それからワディントン夫人の両手を取ると何も言わずにキスをした。彼女は私の方を振り向くと、手を差し出し「お休みなさい！」と言った。私はかなり熱を込めて握手をしたと思う。というのも、どういうわけか私は深く感心していたからだ。その少女には名づけようのない力があり、その前で人は後ずさりするほか

なかった。彼女は一瞬ぐずぐずしていたが、自分の部屋に向かって薄暗い廊下の中を急いで消えて行った。ワディントン夫人はスクロープの腕にやさしく手をかけて、彼を応接室へ連れて行った。彼は泣きごとを言うようには見えなかった。彼のプライドが彼の心の中でうずき燃え盛っていた。そしてそれが彼の自制心を支配していた。

「僕たちの婚約は終わりを迎えたよ」と彼は簡単に言った。

ワディントン夫人が手を組んで尋ねた。「何か理由がおありですか？」

「何もないさ。」

確かにそれは残酷なことだった。しかし、私たちに何が言えただろうか？夫人はソファに深く腰かけ、母親のように静かな思いやりでもってその気の毒な青年を見つめていた。彼女の大きな包み込むような哀れみが彼をいらいらさせた。彼は本を取り上げ、夫人に背を向けて座った。私も別の本を取り上げたが、読むことができなかった。座ろうとしたとき、スクロープもまったく頁をめくっていないことに気がついた。ワディントン夫人はとうとう心配になって、訴えるように私の方を見た。夫人は腰かけているソファの上で落ち着かなさそうに体を動かし、私が庭ではのめかした漠然とした疑問を誰もが理解できるように目に見えるような形にしようとしていた。もう今となっては、不当にスクロープの気分を害することなしに何かを彼女に説明することはできなくなった。しかし、私の緊張はますます高まり、漠然とした予感が私を苦しめた。私はついに本を投げ捨てると部屋を出た。ワディントン夫人が廊下で追いついて来て、「不貞」への妙な言及によって私が何を言いたかったのか「平易な言葉」で説明して欲しいと要求してきた。

「それについて今ここで語る必要はないでしょうし、そうすれば辛いことにもなるでしょう」と私は答えた。「しかし、明日ローマに帰ると約束して下さい。ローマなら安心して話すことができます。」

「ええ、すぐに立ちますわ。お約束します！」と夫人は答え、私たちは別れた。私は階段を上がって部屋に戻ろうとした。そのとき、かさかさとして夫人のドレスが廊下で擦れる音がした。ためらっているような音だった。それから扉をノックする音が聞こえた。夫人はアディナの部屋の前に立っていた。私は思わず立ち止まり耳をすませた。沈黙のあとでノックの音がした。再び何の音も聞こえてこなかった。三度目のノックの音がした。その後、部屋に入るのをあきらめたらしく、夫人は立ち去った。横になっても無駄だった。眠れないことは分かっていた。私は開けた窓のそばに長い間立って、スクロープに何か言うべきことがあるかどうか考えていた。三十分後、私は再び庭に出て行き、小さな小道をぶらぶらと歩いていた。そこには誰もおらず、アディナの部屋の窓には明かりが灯っていた。何もなかった。私にはスクロープに話せることは何もないように思われた。唯一私にできることは、明日アルバーノを立ち、できるだけ早くローマとイタリアから立ち去り、一年後、再びアディナとの幸運を試してみるべきだと伝えることだった。朝方になってようやく私は眠りについた。

朝食はワディントン夫人の客間に用意された。スクローブはきれいに髭をそり、髪をといて時間どおりに現れた。それはまるで彼がまだアディナと婚約中であるかのような振る舞いであった。もちろん、胸の内は見た目ほど落ち着いてはいなかった。前日の夜に自分を否定した女性と朝食の席で顔を合わせる心が心地の良いことであるはずがなかった。ワディントン夫人は少し私たちを待たせたが、しばらくすると驚くような元気で現れた。上品な夫人の顔は額からあごまで紅潮しており、手はくしゃくしゃになったメモをつかんでいた。夫人はソファに倒れ込むと突然泣き始めた。にやにやしている女中をkarouじて部屋から追い出すだけの時間はあった。「いないのです、いないのです、いないのです！」泣きじゃくりながら夫人は叫んだ。「ああ、あの頭のおかしい、心の曲がった恩知らずめ！」

もちろん、夫人が何のことを言っているのか、スクローブには紅茶ポットほどにも分からなかった。しかし、私よりすばやく彼女の言っていることを察した——それでも、私は長い驚きのため息をついたと思う。夫人がくしゃくしゃになったメモを突き出したとき、スクローブは立って夫人を見つめていた。アディナは、心の準備ができていない彼にあまりにも大きな恐怖をもたらした。彼女は夜中の間に私たちをおいて出て行ってしまっていた。彼の無言の驚きはほとんど人を感激させるよう徴候で、それは少女を傷つけたかもしれない思考が不在であることを示していた。私の顔つきから私が何か知っていることをスクローブは見取り、ワディントン夫人の手から私がメモを取り、それを声に出して読むにまかせていた。

「すべてのことにさようならを言わせて下さい！お望みなら私のことを気がふれたとお思になって結構ですわ。説明することなど不可能です。私のことはただお忘れになって、私が幸せで、幸せで、幸せであることだけを信じて下さい！
アディナ・ビーティ」

私は彼の肩に手を置いた。それでもなお彼には理解する力がないように見えた。「アンジェロ・ビーティはついに復讐を果たしたんだ！」と私は重々しく言った。

「アンジェロ・ビーティ！」スクローブは叫んだ。「あのイタリア人の物乞いめ！これは嘘だ！」

私は首を振り彼の肩をたたいた。「彼はいつも支払いにこだわっていただろ。頭のいい奴だ！」彼は私が知っていたことを見取り、取り乱した様子で、ゆっくりと、真っ赤な顔で答えた！

それは極めて異常な出来事だった。それが異常な出来事だと繰り返し口にする時間はたっぷりあったが、そのことを本当に理解することはできなかった。スクローブもワディントン夫人も二度とアディナに会うことはなかった。スクローブは一週間の間一言も話さなかった。とうとう彼が口を開いたとき、彼の心の傷は永遠に刻まれ、彼が残りの人生を徹底的な冷笑家として過ごすつもりであることが分かった。ワディントン夫人は、以前にも言ったように、善良な女性であったが、それだけでなく公明正大な女性でもあった。しかし、これは確信して言える

が、夫人は継娘を決して許さなかった。それから数年後、年齢を重ねるにつれて私は、人がよく言うように、この事件に一役買ったことにますます満足するようになっていた。単なる行為としては、私にはそれが素晴らしいものに思えた。そして人間の本質を判断するとき、私はこの事件と、強い衝撃が弱きものの中で粉々にされ分別があることによって歪められる永遠の光景とを、しばしば心の中で比較考量した。この事件には分別と呼べるようなものがないことは確かである。しかし、燃えるような、十分成熟した肯定的な情熱があった。一度ならず私はこの異端的言説をワディントン夫人の前で表明したが、彼女はいつも途中で私をさえぎり、「これは憎むべき事件です。あの娘の父親がこの事件を見るのがなかったことを私は天に感謝します」と言うのだった。

私たちはあの憂鬱な日が終わるのをアルバーノで経験したわけではなく、その日の夕方にはローマに帰って来た。出発する前、私はラリチアのジロラーモ神父と面会した。しかし、甥が言ったような敬虔な人物であるという印象を彼からは受けなかった。不誠実そうな目をした浅黒い顔の煙草の臭いのする年配の小柄な神父だった——男前の甥に最後の切り札の使い方を教えることができそうな人物だった（私にはそう思えた）。しかし私は彼に意味のない非難を向けるつもりはなかった。私はただアンジェロがアディナをどこに連れて行ったのか知りたかっただけである。もしアディナが自分は幸せだということを彼女の友人を代表してやって来た人物に自らの口で主張することができれば、誰も彼女を連れ戻そうとはしないという真剣な約束をして、私は苦勞して彼女の居場所を聞き出した。彼女はローマにいた。そしてその神聖な都市で、彼女の友人たちは彼女をそっとしておかなければならなかった。「忘れないでいただきたい」と神父はとてもやさしく言った。「彼女はもう成人しており、自分で自分の行動の責任を取れる年齢なのです。彼女は自分のお金で自分のしたいことができるのです——彼女はかなり多くのお金を持っているのでしょうか、ねえ？」彼女は彼が思っているほどお金を持っていなかったが、明らかに神父は何を根拠にそんなことを言っているのか分かっていた。前日、その若い二人を結婚させたのは彼だったことを認めた。式はその日の朝五時にアルバーノの丘の上の古い小さな円形の教会で執り行われた。「そうなんですよ」と、黄色い手をゆっくりこすり合わせながら彼は言った。「彼女はとても好きになってしまったんです！」私は自分の発言によって、アンジェロには晴らさなければならない恨みがあるのだと彼に言わせる機会を与えるつもりはなかったが、自分の甥は世界でもっともやさしい男だと彼は断言した。私は黙ってそれを聞き、その場を辞した。少なくとも、アンジェロについての私の好奇心はまだ満たされていなかった。

ワディントン夫人もこのような感情を自分が告白していたよりもずっと多く抱いていた。怒りの抗議のもとで夫人の良心は、アディナはいったいどうやって生活しているのか、彼女がきちんとしたところで生活しているのかと思い悩んでいた。したがって、私がバルベリーニ広場の近くの若い二人の住まいを訪れたのは夫人の暗黙の要請によるものだった。そこは庶民的な地区で、カプチン派修道院の古い趣のある庭が見える場所だった。香りという意味では、窓枠

に置かれた緑の瓶に挿された大量のナデシコの激しい息遣い以外にはこれといって何も気づかなかった。アンジェロがそこに立って、ナデシコを一本小さくちぎっていた。恋の主人公にぴったりの姿だった。初め彼は恥ずかしそうに、すこし冷たく私の方を見た。それはまるで、起るかもしれない騒ぎに断固立ち向かう準備を整えているようだった。しかし、私が過去のことについては一切触れるつもりがないのを見て取ると、自分が平穏な安らぎの中で暮らしていることを陽に焼けた額が表してしまうことに戸惑っていた。私は一週間前にも彼を悪人と呼ぶ気はなかったが、今も彼を悪人と呼ぶ気はなかった。しかし、彼は一つの謎ではあった——彼の求愛の方法と同じく彼の性格は大いに謎めいていた。彼が恋をしているというつもりはない。しかし、彼はすでに彼の幸福がどのようにやって来たのか、そして、魅力を讃えられることにおいて一種原始的で自然な、感覚的な喜びの恩恵に自分が浴しているということを忘れていたと思う。それはまるで暖かい陽射し、あるいは、たっぷりある良質のワインのようだった。彼が自分の幸運に驚いているということなどまったくなかったと思う。すべての真正ローマ人の心の底には——たとえ彼が物乞いのぼろをまとっていても——彼らは我々を野蛮人とみなし、我々は彼らに貢物を差し出す存在であるという拭い難い確信を持っていることが分かるだろう。彼は奇怪なすべての迷信に歓迎されていたが、それらの迷信はアディナにどんな未来を約束したというのだろうか？私は彼女と話をさせて欲しいと頼んだ。アンジェロは肩をすくめて、彼女が嫌でなければねと言い、私の希望を伝えに隣の部屋へ行った。どうやら彼女は判断に迷っているようだった。あれほど大胆に飛び移った醜い亀裂の反対側で彼女は どう見えるのだろうかと考えながらしばらく待っていた。ついに彼女が現われた。私はすぐに私の訪問が彼女を困惑させているのを見て取った。彼女は自分の過去をまったく忘れ去りたいと願っていた。彼女は青ざめ、深刻そうな面持ちだった。沈黙という無関心の仮面をつけているように思われた。以前彼女が独特な女性のように思われていたとしても、そこにいる彼女の姿を見ること、つまり、並はずれた夫のそばにいる彼女を見ることは彼女を理解する何の役にも立たなかった。私の目は一人からもう一人の方に移り、それが私の考えを露呈したのだと思う。彼女は突然私が何の用で来たのか知りたいと要求した。

「あなたが幸せかどうか見てくるよう頼まれたのです」と私は言った。「ワディントン夫人はローマを離れる決心ができないのです。可能性がある間は、あなたが——。」私は言葉を探してためらった。すると彼女が私をさえぎって答えた。

「後悔ですか、あなたのおっしゃりたいのは？」彼女は一瞬地面に目を落とし、それから突然目を上げた。「ワディントン夫人はローマを去られても結構だと思います」と彼女は穏やかに言った。私は黙ったが、一瞬、ちょっとしたお別れのメッセージを待った。「私のことは忘れていただくことを望むだけです！」と言って、私が立っているのを見ていた。

愛とはとりわけ利己的な情熱だと言われている。もしそうなら、アディナの愛はかなり深くまで進行している。「あなたのことを忘れる約束なんてできません」と私は言った。「あなたと

ここにいる私の友人は記憶されるに値するのです！」

彼女は背を向けた。アンジェロは私たちの英語での会話が終わったことにほっとした様子だった。彼は私のために扉を開け、意識した意味ありげな笑みを浮かべて一瞬待っていた。

「彼女は幸せだろ？」と彼は尋ねた。

「そう言っているね！」

彼は私の腕に手を置き、「僕もそうなのさ！——彼女はトパーズより素晴らしい！」

「君はまったく変わった奴だよ！」と私は叫び、彼を押しつけて急いで立ち去った。

ワディントン夫人は継娘に悔い改める機会を再度提供した。というのも、夫人はさらに二週間ローマに留まっていたからだ。夫人は、アディナがいかんして監視の目を逃れ、恋愛をし、秘密を守りとおすことができたのかについて私がいかなる情報ももたらすことができないことにながかりした。彼女には求愛の期間などほとんどなく、逃亡する直前の朝ジロラーモ神父と神父の甥に教会で会うために宿から脱出するまで、彼女は恋人の声をほとんど聞いたことがないと私は思っている。多分、ちょっとした兆し、ちらっと向けられた眼差し、その他言葉にされない誓いや、二、三のメモぐらいはあったかもしれない。正確にアンジェロが誰で、もともと何がきっかけで私たちが彼の関心を得る榮譽を得たのかワディントン夫人には最後まで分からなかった。彼が友だちのいない美しいイタリア人というだけで夫人にとっては十分だった。すべてが苦痛に満ちた謎解きであるところでは、一つや二つの多少不明瞭な点はほとんど問題にならなかった。もちろん、スクロープの無言の思考にとって、自分自身の無知はひどく奇妙なものに思えたけれども、彼は自分の無知について説明しようとはしなかった。私が言ったように、彼がアディナのことに触れたのは一度だけだった。

彼は本能的に、あるいは予感にもとづいて——というのも、私は彼に話さなかったのだから——私が彼女に会いに行ったことに気づいていた。そして、私が彼女のところを訪問した日の夜遅く、通りを散歩しようと私を誘った。ほんやりと点々とした雲のかたまりの間を月がゆっくりと漂っている穏やかな湿っぽい夜だった。暖かい南の風が町の薄暗い中心に吹き込んでいた。「サンピエトロ寺院に行って、気まぐれな月明かりに遊ぶ噴水を見に行こう」と彼は言った。聖アンジェロの橋まで来たとき、彼は立ち止まり、テヴェレ川をのぞき込みながらしばらく橋の欄干にもたれていた。ついに、突然からだを起こすと次のように尋ねた。「彼女に会ったんだね？」

「ああ。」

「何と言ってた？」

「幸せだと言っていたよ。」

彼は黙っていた。そして歩き続けた。橋の中央まで来たときもう一度立ち止まり川を眺めた。それから小さなビロードのケースをポケットから取り出し、それを開けると、何かを月の明かりで光らせた。それはあの美しい、皇帝の、不吉なトパーズだった。彼は私を見た。私は彼の

視線が何を意味しているのか分かった。その視線で私の心臓が高鳴った。しかし私は言わなかった——「やめろ！」と。それは冷酷な紋章の施された黄金の呪いの宝石だった。それをローマの過去の朽ち果てた闇の世界に戻してやろう！彼の片方の手を私はしっかりと振った。彼はもう一方の手を伸ばすと、大きく腕を振って、そのきらきらした宝石を暗い川の中に放り投げた。そこに眠るがいい！いつか人は宝探しのためにテヴェレ川の土砂をさらい、おそらく私たちのトパーズを掘り出し、それが何であるか知ることになるだろう。しかし、何世紀にも及ぶ埋葬に対する情熱に満ちたこの人間幕間劇をいったい誰に想像することができるだろう？